
高天原物語

兎鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高天原物語

【Nコード】

N2447U

【作者名】

兎鬼

【あらすじ】

高天原 神々と妖怪が住む世界。

そんな高天原に住む《スサノオ》はたびたび起きる事件を解決し、高天原を守っている。

しかし、その事件は徐々に大きくなり・・・

『一章 始まりの話』(前書き)

神話を題材にした話です。何か間違っていたりするかもしれません。
御注意下さい。

『一章 始まりの話』

ここは高天原、色んな神々や妖怪が大勢いるんだ。

「おはよー天姉ー」

スサノオは眠い目を擦りながら挨拶をした

「あらおはようスサノオ」

「何故に抱き付く」

「可愛いから」

「つつたく・・・」

天姉、アマテラスは座敷に座った。朝食はスサノオが作るのである。

(天姉が料理しているところ見たことねーな)

そんなことを思いながら料理に取り掛かる

暫くして味噌汁が出来た。それと同時に

「お、朝食出来たか」

そう言いながら現れたのは《ツクヨミ》アマテラスの弟でスサノオの兄である。美青年な見た目だが陰が薄く、あまり知り合いはいない。

「「「じゃ、いただきまーす」「」」

三人はそう言い、朝食を食べ始める

「お、スサノオの卵焼きか」

ツクヨミは箸で卵焼きをつつく

「天姉は料理出来ないの？」

スサノオは疑問をぶつけた

「んー？出来るわよ」

「じゃあなんで俺に作らせて・・・」

「めんどくさいから」

相変わらず天姉には呆れさせられる、しかしどこか憎みきれないところもあるから不思議だ。

暫くして朝食を食べ終わるとアマテラスが

「出雲村にまでちょっと行ってきてくれないかしら」

「なんだ唐突に、出雲村なんて・・・」

割りと近くにある村だが、少し前に妖怪に襲われ、近寄る人も少なくなつたと聞いたが

「私の知り合いがいるの、その知り合いにね。櫛を頼んでいて」

「取りに行け、と？」

「そ、よく分かったわね」

「すぐ近くじゃないか」

「嫌よ、めんどくさいし妖怪に襲われたらどうするの」

俺が襲われたらどうする。そう言いたかったが言わないでおこう。

しかしこうも頼まれたら断る訳にもいかない。それにただ櫛を取りに行くだけだ、何を渋る。

「分かった、行ってくるよ」

「ありがと、じゃ、行ってらっしゃい」

スサノオは刀を腰に差し、家をあとにした

出雲村に行くには小さな森を抜ける必要がある。

しかしこの森には妖怪が出ると言われ、あまり立ち入る者はいない。

「しかし気味が悪い・・・」

昼頃とは言え、森のなかは暗くなっていた。

辺りを警戒しながら進む

ふと空を見上げると日が沈み始めていた。

空に一筋の光が横切る

「流れ星か、珍しいな」

しかし日が沈み始めたのはマズイ、早く村に着かなければ。

スサノオは少し歩みを早めた。辺りが暗くなるころ、森を抜けた。少しホツとすると村の明かりが見える、しかし人が無い

不気味に思いながらもスサノオはアマテラスの知り合いを探した。

櫛、だと言うのだから店でもしているのだろう。

そう思ったときだ、目の前に『櫛屋』と書かれた店を見つける

「すみませーん」

スサノオは店の者を呼ぶ、しかし返事は無い

留守か？いや、明かりは点いている

「すみませーん！」

次にスサノオは少し大きな声で言った

すると扉が小さく開き、隙間からこちらを見る目が見える

「あ……アマテラスの知り合いで……？」

「あなたがスサノオ？」

「え、ええ」

すると扉が開き、少女が姿を表す

「どうぞ、入って下さい」

しかしその声は暗く、沈んでいた

「えと……なにか……？」

少女が何か警戒しながら聞く

「いや、天姉が櫛を頼んでみたいでさ」

「ああ、櫛ですね」

少女は奥に入り、暫くして手に櫛を持ち戻ってきた

「これです」

スサノオはその櫛を受け取り、懐に仕舞った

「これが、私の最後の櫛ですね」

「あんた、名前は？」

「・・・《クシナダ》」

小さく答えた

「なあ、何があつたんだ？人気も無いしあんたも変に暗い」

スサノオは思いきつて疑問をぶつけた

「今夜なんです・・・」

「今夜？」

「はい、《ヤマタノオロチ》が贄を喰いに来る日・・・その贄が私なんです」

ヤマタノオロチ・・・妖怪のなかじゃ強いことで有名なアレか

「そんな・・・なら逃げよう！」

「なりません！そんなことをすれば村の皆が殺されてしまいます！」

「つくそ！」

目の前に困っている人がいる。それをどうにかしようとしてしまうのがスサノオだった。

「でも、最後にアマテラスさんに頼まれた櫛を渡せてよかった・・・

」

クシナダは少し微笑む

「っ・・・」

そんなクシナダの表情を見て、スサノオは言葉に詰まる

「では、さようなら」

またクシナダは笑う

スサノオは店を出た

「きゃああああ！！」

そしてすぐにクシナダの悲鳴が聞こえる

「クシナダ！」

店に戻るとクシナダの姿は無く、裏口の扉が開いていた

「っ！ヤマトノオロチィィ！！！」

スサノオは裏口を通り、クシナダの跡を追った

『二章 八首の蛇』

「どこだ！クシナダ！」

随分と山の奥に来た。

しかしヤマタノオロチ・・・どのような妖怪だろうか、かなり昔から存在した妖怪だと耳にしたこともある。

「これは」

地面に簷が落ちていた、それはクシナダが付けていたものだった

ふと見ると草木が掻き分けられたあとがある

スサノオはその方向に走っていった。

暫く走ると広い草原に出た

そこに一人の人影がある。

「クシナダ！」

その人影はクシナダを抱き抱えていた

「・・・よほど助けたいのか、この娘を」

男の声だ、人影はクシナダを降ろし、近くの木にもたれさせた

「お前がヤマタノオロチだな・・・？」

「いかにも、俺がヤマタノオロチだ」

月明かりが人影を照らす。その影は人のものではなく、八つの首を持った蛇だった

「なぜこんなことを！」

「なぜ？妖怪も生きるために必死なんだ、力無きものは死ぬ、それが弱肉強食」

「何を！だからといって女拐うことはないだろ！」

「ふー、やれやれ。やり合うつもりだな？参ったな、俺には子どももいるつてのに」

ヤマタノオロチは剣を抜き、構える

「何が正しいかじゃない、正しい、間違いを争っている時点で間違いなんだ。来い、少年」

「おおおお！」

スサノオは一気に走り込み、ヤマタノオロチに斬りかかる

しかしヤマタノオロチは剣筋を避け、手に持った剣を降る

ドッ!

強い衝撃、それと共に吹き飛ばされるスサノオ。地面に生えていた草は弧を描き吹き飛んでいた

「感情に任せるな、いくら経ってもそれじゃあこの《アメノムラクモ》には敵わないぜ?」

ヤマタノオロチは剣を仕舞うとくるりと振り返る

「じゃあな少年、興も覚めた。その女は置いてくよ」

ヤマタノオロチはそう言うと闇に消えた

「……かはあ!」

体に走る激痛に耐え、なんとか立ち上がったスサノオはよろよろとクシナダの方へ歩く

「クシ……ナダ……」

ドサッ

スサノオはクシナダの前で倒れ、動かなくなった

「あの少年……いい目をしている……」

ヤマタノオロチはくい、と猪口に注がれた酒を呑む

「スゴイ！父ちゃんもう八本も呑んだの!？」

隣で小さな少女が跳び跳ねている

「ククツ、久しぶりに期待出来そうな奴に出逢ってさ、嬉しいんだ」

ポンツとヤマタノオロチは娘の頭に手を置く

「お前もいつか戦うだろうよ・・・」

「む・・・」

朝日でスサノオは目が覚めた

上半身だけを起こし辺りを見渡す。

ここはクシナダの家だった。

「ああ、そうか・・・」

ヤマタノオロチからクシナダを取り戻そうと・・・

そこまで思い出したときだ。

「あ、起きましたか」

クシナダが盆に朝食を乗せて運んできた

「その・・・昨日はありがとうございました・・・」

「ん、ああ。いいよいいよ、っっ!」

少し傷が痛む、何故あれほどの力を持つのにあの時俺を殺さなかったのか

「ああ、大丈夫・・・じゃないですよね」

「いや、いいんだ。こんな月兄との喧嘩に比べたら」

月兄とはツクヨミのことである、昔はよく喧嘩をしていた。

「あの、その。お口に合うか・・・」

クシナダが味噌汁と白飯をスサノオの前に出す

「え、あ、ありがとうございます。いただきます」

戸惑いながらもスサノオは箸を動かす。

「美味しい・・・」

「ほんと?よかったあ」

ぱあっとクシナダは笑顔になる

「・・・!」

その笑顔を見てスサノオは顔を赤らめる

なに顔を赤くしているんだ！しかし、よく見ると割りと可愛らしい
ではないか……

「あの……何か？」

「つと、いやなんでもない」

いつの間にかクシナダを見ていたみたいだ

朝食を食べ終えて、さて帰ろうとクシナダの家を開けたときだ

目の前には村の人々であろう者たちが待っていた

「おお！あなたがクシナダを助けた……」

そのなかの一番の年寄が話しかける、恐らく村長であろう

「この度は感謝いたす、クシナダと村を守ってくださって」

「村？」

「ええ、あれからヤマタノオロチから文が届いてな、村には近づか
ない」と

「そうですか……」

「ワシらは無力じゃった、以前にもクシナダの姉妹が襲われたが・
・ワシらは怖くて何も出来んかった・・だから嬉しいのじゃよ、
あんたが来てくれて」

「そ、それはこちらこそ」

こうして感謝されるのはいつ以来だろうか

「それじゃ、またいつか」

スサノオはそう言うと村を出ていった

「しもうたな、名を聞くのを忘れておった」

「彼はスサノオ、スサノオと言います」

クシナダが村長にそう言った

「そうか、スサノオか・・・」

スサノオの背を村長は見えなくなるまで見ていた

『三章 北欧終焉記』

ヤマタノオロチから数日後・・・

空に異変が起きる

「嫌ね・・・日蝕なんて」

アマテラスが太陽を見上げて呟く

その太陽は黒く欠け、その輝きを失いつつある

「ああ、嫌な予感がするな」

ツクヨミが珍しく話に入る

「太陽ねえ・・・何か得をする人・・・」

「ああ、あいつらか？」

ツクヨミは何か思い出したかのように言う

「あいつら？」

「最近現れ始めた吸血鬼だよ」

「吸血鬼ねえ・・・」

「あいつらは日の光が嫌いだからな、得をするとさえはするな」

「うーん、スサノオにでも調べてきてもらおうかしら」

「で、呼ばれたんだが。なんだ、手がかり無しに調べると?」

流石にこれにはスサノオも怒る

「そう言うと思ってね、博識な友人を連れてきました!」

「ども」

隣に座っている女性が挨拶する。

スサノオは彼女が誰なのか知っていた

「で、私に聞きたいことって?」

「どうして太陽が欠けたの?」

アマテラスが率直に言う

「……あのねえ私は辞書じゃないのよ……いくら私でも知らないものも……」

珍しい、彼女の口から知らないと言う言葉が出るのは。

スサノオは少し嬉しくなった、彼女の知恵に敵うものはいないと思っていたからだ

「……ん、待てよ」

「何かあるの?」

「ああ、日蝕って現象ね」

「日蝕？」

「太陽と月が一直線に並ぶ現象よ、丁度太陽に月が被さって隠れるんですって」

彼女に知らないものはほんとにあるのだろうか。

「ま、この人たちは知らないでしょうけどね」

「この人たち？」

「ああ、いいの、気にしないで」

スサノオは少し気になり質問したがアマテラスに流された

「そう言えば最近北のほうに聞いたことのない職業を名乗る人が現れたみたいだけどその人なら知ってるかもね」

「聞いたことのない職業ねえ……」

「……ところで俺は何をすればいい」

「ああ、そうだったわね。でも聞いた限りでは自然に治るものなんですよ？」

「ええ、そうね」

「そう言うことだから放って置きましょう」

「あ、ああ・・・」

そうして彼女は帰ることにした

「・・・本来、日蝕は短時間の現象なんだけどね・・・」

「ん？どうかした？」

「いや、何でもないわ。じゃあね、アマテラス」

「ええ、ありがと。《オモイカネ》」

「ふうー・・・」

彼女が帰ったあと、スサノオは溜め息をついた

「あら、何か疲れるようなことがあったかしら」

「そりゃそうだよ、あの時、俺は迷惑かけたからさ」

「あら、そんな昔のことを？」

アマテラスはフツツと小さく笑う

「そうそう、《タジカラ》が帰ってくるそうよ」

「んなっ！帰ってくるの!?!」

「ええ、懐かしいわね」

「最強を目指す。とか言っただけに出たのに？」

「そう言えばそうだったわね」

ケラケラと笑う

湖に佇む一つの館

その館に一人の男がいた。つばの広い帽子を深く被り、高座に座り込み、手に顎を乗せ、何か考え込んでいた。

「軍隊の準備は整っております」

一人の鎧を着た女性がそう報告する。

「避けられる戦いか・・・しかし関係の無い者を巻き込む訳には・・・」

「ですが・・・このままだと彼があなたの息子様を殺してしまいます。《オーディン》様！御決断を！」

「・・・・・・・・・・」

オーディンは暫く黙り込んだあと

「・・・・・・・・・・《ヴァルキリー》、戦を始めろ」

「！承知！」

そう言うとヴァルキリーは部屋を出た

「・・・これ以上死者を出したくはないが・・・これも運命か？
《ウルズ》よ・・・」

既に戦場には敵が待ち構えていた

「・・・また、始まるのか・・・」

オーデインは悲しげに呟く

「行け！《ベルセルク》隊！恐れるな！進めー！」

オーデインは手を敵陣へ向け、指揮を取る

一方、敵陣

「ベルセルクの勢いはなお続くか・・・」

オーデインと対峙するのは巨人たちである、そのなかの黒い鎧を着た巨人が呟く

「進めっー！！なんとしてでも倒せ！」

「オオオオオオ！！！」

何人もの巨人が突撃する

「《スルト》様、《バルドル》の居場所が分かりました！」

一人の巨人が黒い鎧に報告する

「なに？ならば直ぐに行け！《フルングニル》！」

「承知！」

そう言うとフルングニルは走っていった

「オオオオオ！」

どうやらオーディンの軍と交戦が始まったようだ

ベルセルクは鎧を着けない、だがその為に素早さは凄まじい、だが防御はとてつもなく脆い。それに加え巨人たちは動きこそ遅いが力があり、多少のことでは動じぬ防御がある。

「我々は貴様の封印するものが欲しいのだよ……」

スルトは遠くにいるであろうオーディンを見て言う

二つの軍が交戦し始めた頃、高い木の上に一人の人影があった

「……まーた戦争かー、とばつちり受けなきゃいいんだけどなー」

鳥のような羽が生え山伏の衣装を着た、そう、天狗がいた

「さつさと知らせるかな、嫌な予感もするし」

そう言うと天狗はバサツと飛び去った

「まあ、戦争が始まつてる?」

アマテラスは驚いた

「そ、オーデインとスルトだよ。仲悪いねほんと」

先程、戦場を見ていた天狗が得意気に言う

「天姉、天狗の言うことなんか・・・」

スサノオが相手にするなと言わんばかりの態度で言う

「そんな、私やこの目で見たからね!」

天狗は自分の目を指差して主張する

「というか大天狗のお前が里放つたらかしてる暇あるのか?天狗総出で探してると思うぞ」

「あ、いけね、忘れてたわ」

「やれやれ、これで大天狗だとはな・・・」

「心配してるだろうから帰るね!じゃ!」

バサッ！

大天狗は大急ぎで仲間の元へ帰った

「スサノオ」

「な、なんですか？」

こっそり部屋に戻ろうとしたスサノオだがアマテラスに呼び止められる

「何か異変があればよろしくね」

「はあ・・・分かったよ」

ため息が出る、しかし嫌な予感がする。本当に異変が起きそうだ。

誰もいなくなったオーディンの館

いや、まだ数人が館にいた

「異常はないか？《ヘイムダル》」

赤髪の大男が髭を蓄えた小さな老人に話しかける

「ああ、異常なしじゃよ《トール》」

「いつ奴らがここに来るか分からんからな、気は抜けん」

彼らはこの館の地下にいる人物を守っていた。その人物こそバルドルなのである。

地下

一人の人影がバルドルに近づく

「よう、どうだい？バルドル」

にこやかに笑った少年はバルドルに話しかける

「辛いね、戦争が終わるまで閉じ籠るのは」

「でも君の死が終焉の始まり、そうだろうか？」

「ボクは死なないはずなのにね」

ハハッと軽く笑う

「そうだね、君は死なない。全てのものに殺さないと約束したからね」

「そうみたいだね」

「でも、一つ見落としがあった」

「えっ？」

ドクン、バルドルの体に激痛が走る

震える足元を見るとヤドリギが転がっていた

「な、何を……」

「見落としてはね、ヤドリギだったんだよ」

「こんなことして……なんに……なる……」

徐々に視界が暗くなる

「残念だけどバルドル君、君を殺すのがボクの計画」

「貴様あ！」

うつ伏せに倒れたバルドルは少年を睨むが、目を閉じ、動かなくな
った

「……ハハッ、死んだ！ざまあみるバルドル！何が不死だ！ヤド
リギ程度に死んだじゃないか！」

少年は高らかに笑った

「……ククク……これでボクが行う《ラグナロク》が始まる……
」

少年はそう呟くとふらふらとどこかへ歩いて行った

『四章 全てを喰らいし狼』

戦場

「スルト様！予期せぬ出来事が！」

フルングニルがスルトの元へ戻ってきた

「何があつた」

「何者かにバルドルが殺害されました！」

それを聞いたスルトの顔色が悪くなる

「な、なんと・・・誰が・・・」

「このままでは終焉が始まってしまいます！」

「どうやら争っている場合じゃないようだな、オーディンよ」

スルトはバツと手を伸ばし

「全軍退け！異常事態発生だ！」

暫くしたあと、戦争は中止され、軍は戻った

「何を企んでいる？スルト」

オーデインは突然の撤退に戸惑った

「！敵兵！」

一人の兵士が指差す先には馬に乗った巨人がこちらに向かってくる

「単騎……？構わん！やれ！」

ヴァルキリーが命令したときだ

「よせ、やつはスルトだ。束になったところで命を無駄にする」

ゆっくりとオーデインは立ち上がり

「やつは単騎で突っ込むほど気は荒くない、何かあったのだろう」

そして馬に乗ったスルトがオーデインの元に到着した

「久しぶりだな、オーデイン」

「ああ、全くだな、スルト」

スルトは馬から降りる

「何か話か？」

オーデインがそう尋ねる

「……バルドルが殺された」

その言葉に辺りが騒然とする

「殺されたって・・・あんたたちがやったんじゃないか!？」

一人の兵士が言つとそうだと周りも言つ

「確かに一人向かわせたが到着するころには既に・・・」

一体誰が・・・? トールとヘムダルに見張りをさせている・・・
まさか奴等が? いや、あいつらは裏切るような奴では・・・

オーデインはぐるりと兵士を見渡す

「・・・《ロキ》はどこだ」

兵士たちは顔を見合わせるが首を振る

「・・・どうやら、裏切り者がいたようだな」

スルトが皮肉に言つ

「クツクツクツ・・・おのれえロキィ!」

怒りにオーデインは叫ぶ

「さて、どうする? このままでは最悪の事態になる」

「貴様と組むしかないようだな」

「よく分かってるじゃないか」

スルトがヒューと口笛を吹く

「あれが復活すればこの世界は終わる、早くロキを捜そうか」

「ああ、そうだな」

その時だ

オオオオオオ！！

恐ろしく大きな遠吠えが聞こえた

それと同時に黒く染まってゆく太陽

「どうやらもうお目覚めのようだ」

スルトが馬に乗る

「さあ行くよ、オーディン」

「ヴァルキリー、《スレイプニル》を用意しろ、あと全兵士を館に帰還させる」

「オーディン様！？何故帰還命令を」

「よいから館に戻れ」

「・・・ハッ！」

暫くして八本足がある馬を引き連れ、ヴァルキリーが戻ってくる
そしてぞろぞろと兵士たちは館へ戻っていった

「さて、行こうか戦友よ」

「ふん、何が戦友だ」

二人は馬を走らせた

「やっぱり嫌な予感は当たったわね」

黒くなった太陽を見上げてアマテラスは呟いた

「まるで夜だ、こりゃ妖怪たちが喜ぶな」

「あら、スサノオまだいたの？」

「いやいや、そんなすぐに飛び出すわけにはいかないよ」

「あの大きな遠吠え聞かなかったの？」

「聞いたけどさ、馬も何もないんだよ？」

「それはお任せを！」

風を起こし現れたのは大天狗だ

「ああ、天狗なら運んでくれるわね」

「いや、ちよつと待て」

しかし大天狗はスサノオの襟を掴む

そして

バサッ

高く飛び立った

「無事帰ってきてねー」

アマテラスが呑気に手を振っている

「お、降ろせ！何勝手に協力してんだ！」

「わわっ暴れないで下さいよ！」

「・・・で、また里放つといてこんなことか、部下にやらせるよ。
一応長なんだろ？」

「いやねえ、実際暇なんですよ、長つてのも。烏天狗だった頃のほう
が全然ましですよ」

「・・・そんなものかねえ」

「・・・む、ありや戦争してた奴等の大将じゃないか」

スサノオは下を見る、馬が二頭走っているのが見える

「流石にあんな大きな遠吠えを聞いたらいくらかがみ合った相手でも手を取り合うものだね」

「なんか既に解決しようとしてる人がいるみたいなんで帰らせて下さい」

「別にいいですけどその場合あなたのお姉さんが臆病者のスサノオってみんなに言いふらすそつですよ」

「うわ、なんだよそれ」

「あなたも大変な姉をお持ちなようで」

「お前もか？」

「んー私は・・・友達がそれかな」

「友達いたのか」

「んなつ！落とすよ！？」

「悪かった！悪かった！」

グオオオオオ！

唸り声が一段と大きく聞こえる

「・・・近いな」

「ですね」

「ん、大天狗。あの山の頂上から」

スサノオは目の前にある山を指差す、そこからは黒い煙が上がっていた

「あれが怪しいですねー」

その時だった

ポッ

その黒い煙のなかから一つの火球が飛んでくる

大天狗が間一髪それを避けるが

「羽をやられました、落ちます」

「そう簡単に言うな！頑張れ！」

「無理です！痛い！」

「うわあああああ！」

二人は山の麓に落ちた

「いつつ・・・大丈夫か？」

頭を擦りながら大天狗を探す

「おい、大天狗？」

しかし見当たらない

「下ですー・・・」

掻き消えそうな声から聞こえる

下を見ると大天狗がいた

「うわっすまん！」

スサノオはすぐさま大天狗から離れた

「全く、死ぬかと思いましたよ！」

二人は目の前の山を見上げる

「登るしか無さそうですねー」

「ああ、だな」

「よし私も行こう」

「はい？」

「ほんとはどこで帰ろうと思ったけど羽根怪我したし飛べないしね」

「おいおい、いいのか？」

「へーきへーき、よく悪戯して殺されかけてるから」

それは平気なのだろうか。スサノオは疑問に思ったが山を登り始めた
幸い小さな山で急斜面はそんなくない

「割とすいすい進むな」

暫くして広い場所に出た

「む、なんだ貴様は」

そこで二人の男に遭遇した

オーディンとスルトである

「妖怪連れてこんな山に何の用で？」

スルトが言う

「いやさ、なんか大きな遠吠えが聞こえたから様子を見に行こうと」

「なるほど、悪いが君にこの上にいるものの世話は務まらない」

「スルト、我々でも務まるかどうか・・・」

オーデインが呟く

「割と小心者なんだね、君は」

「それほど奴は強いはず」

「ま、そんなことだ、君は帰りなよ妖怪の彼女を持った少年」

「やだね、俺は帰るわけにはいかないだ」

姉に汚名を着せられる

「ふう・・・やれやれだ、好きにするといい。行くよオーデイン」

「ああ・・・」

スルトは先を歩き始めた

オーデインはその場に残り、スサノオを見ている

「貴様、名は？」

「スサノオ・・・」

「スサノオか、どこかで聞いた名だ」

ドゥー！

オーデインは槍を地面に突き刺す

「貴様にこの先に行く力量があるか・・・試させてもらおうか」

「は？いやいや待て待て！」

オーデインは槍を握り、スサノオを睨む

クンッ

僅かにオーデインの腕が動く

チュン

それと同時に投げられた槍はスサノオの腹を掠り

タアン！

後ろの木に刺さった

「あ・・・あ・・・」

突然の出来事にスサノオは言葉が出ない

「・・・大した度胸だ」

オーデインは木に刺さった槍を抜くと山を登り始めた

「スサノオさん！しっかり！」

「ん、ああ・・・」

まだ足が震えている。全く軌道が見えなかった

スサノオはオーデインに恐怖心を覚えた

「あんなのに怖じけついちゃダメですよ！ささ、行きましよう！」

大天狗はスサノオの腕を引っ張り、山を登り始めた

この山の頂上、そこに一人の少年がいた

「やはり貴様が、ロキ……」

オーデインが言う

「どうやら遅かったようだね」

スルトがロキの背後にいる、それを見上げて言う

ロキの背後には見上げるほど巨大な狼がいた

「さて、《フェンリル》食事の時間だよ」

ロキがパチンと指を鳴らす

「オオオオ！」

フェンリルが空に遠吠えする。

そして太陽が黒く染まり、辺りは夜のように暗くなった

「さあ行くぞ！スルト！」

「ああ！オーデイン！」

「全て喰らってしまえ！フェンリル！」

「グルルル・・・」

「太陽が・・・」

スサノオは空を見上げて不安げに言った

「さっきの遠吠えといい、嫌な予感ですね」

大天狗が相づちを打つ

ドオン！

上の方から大きな音が聞こえる

「急ごう、もう戦っているかもしれない」

スサノオたちは歩みを早める

気づけばやけに静かになった山をスサノオらは登った。
そしてその頂上に着くとまず目に入ったのは巨大な狼、そしてその前に倒れるオーディンとスルト

「お前が・・・！」

「ああ、ボクがやったさ。実にひ弱だったよ」

「その狼を使って何をするつもりなんだ！」

「この世界をボク的手中に納めるのさ」

「なっ・・・」

「フェンリルの力があれば可能なこと、そして全ての生物はひれ伏すだろう！」

「そんなことはさせねーよ！」

「ふん、さあ！フェンリルを目の前の雑魚を喰らえ！」

その時だ

フェンリルは口を開けると

バグン

足元にいた口キを呑み込んだ

「・・・な・・・死んだのか？」

「オオオオ！」

フェンリルが叫ぶ

「やはり来たか、スサノオ・・・」

オーデインがよろよろと立ち上がる

「スサノオ？ああ、あの事件の・・・」

スルトも立ち上がり、フェンリルを睨む

「何か倒す方法は？」

「奴とてかつてはただの狼、急所さえ貫けば死んでしまう」

オーデインが槍を振る

「ワシが奴の懐に潜り込み、奴の顎に《グングニル》を突き立てる」

「よし、なら始めるか。妖怪のお嬢ちゃん。あぶねーぜ？」

「私だって天狗の長です！やるときはやりませよ！」

葉で出来たうちわを取り出し、フェンリルに向けて振る

ゴウッ！

凄まじい風がフェンリルに襲いかかる

しかしフェンリルは怯むことなく

ボウッ！

口から火の玉を吐き出す

「火には火をだ！」

スルトが剣を振る

ゴウッ！

前方が火に包まれ、火の玉を掻き消した

「グオオ！」

フェンリルが突撃してくる

「火の海に吞まれな！《レーヴァテイン》！」

スルトがレーヴァテインを地面に突き刺すとフェンリルに向かって
火柱が走る

火を見たフェンリルは勢いを止める

しかし間合いは十分、フェンリルは腕を振り上げるとスルトに向か
って降り下ろした

ザンッ！

「ギャウン！」

しかしスサノオは腕を斬りつけ、その攻撃を中断させる

「オーデイン、十分な距離じゃないか？」

スルトがそう言い、フェンリルの顔に向けてレーヴァテインを横に振る

レーヴァテインの炎がフェンリルの目を焼き、視界を狂わせる

その隙にオーデインはフェンリルの懐に潜り込み

「やれ！オーデイン！」

「ウオオオオ！！！」

ドッ！

カ一杯下顎に向け、グングニルを突きつけた。グングニルは下顎を貫き、フェンリルの頭から飛び出た

「グオオオオ……」

急所をやられたフェンリルはドウツとその場に倒れ、絶命した

「やったな！オーデイン、スサノオ、お嬢ちゃん！」

「ああ、よかった」

スサノオが安心仕切ったように言う

「いや、まだだ」

その安心を掻き消すようにオーデインが言う

「早く逃げよう、この辺りは河になる」

オーデインがフェンリルを指差す、フェンリルの口からは涎が溢れ出していた

「私なら仲間を！」

どこからか二羽の鳥が飛んでくる

その鳥は人の姿に変わる

「長！また無断で出掛けて！」

「話はあと！この人たちを山の麓まで運んで！」

二人の烏天狗は訳が分からない顔をするがオーデインとスルトを掴み、飛び去る

「さ、私たちも」

「ああ」

ロキはどうなったのだろうか、スサノオはそう思ったがあれに呑み込

まれて生きているはずはないと考えた

そして山の麓に着いた

「大天狗、君には助けられたよ」

スルトが馬に乗り、そういう

「いえいえ」

大天狗は照れ臭そうに言う

「さ、話している暇はない、逃げるぞ」

オーデインが言う

言われてみれば水が落ちる音が聞こえる

「私たちも行きましょう」

大天狗はスサノオを掴むと羽ばたいた

ふと下を見ると山から水が流れ、河が出来ていた

「地形が変わってしまったな、この辺りに住む人たちは迷惑だろうな」

「そうですかね？この辺りは滅多に雨が降りませんしちよつどよかつたと思えますよ」

「あの狼は感謝されるんだろうか」

「ま、偶然の産物ですよ、あの河は」

「しかし・・・」

「何か？」

「太陽はいまだに隠れたままだな」

空を見上げると太陽はまだ黒い、辺りは夜のようだ

「別の何かの原因ですかね、ま、妖怪がはしゃぎますよ、これは」

「鳥は夜には鳴かないんじゃないか？」

「暗かったら見えないですからね。悪戯がしやすいですよ」

「鳴かれるより厄介だ」

『五章 大国の主、動く』

「はあはあ・・・俺の勝ちだな」

一人の男が倒れた男を見て呟く

「勝ったんだ、この場所は俺の場所」

男は縄を取り出すと倒れた男に巻き付ける

バチィ！

「つつ！まだ息があるのか!?!」

強い力に弾かれ、男は慌てる

「・・・誰が・・・やられる・・・かよ・・・!」

倒れた男はゆっくりと立ち上がり、男を睨む

「くっ・・・!化け物め・・・」

今なら止めを刺せる、が、こちらも限界が近い

「悪いがこの借りは返させてもらおう《因幡》!」

そう言ったときだ

背後に何かの気配を感じる

男は振り返るが遅かった

既に後ろにいた何かの足払いにより男はバランスを崩し、倒れる

「今だ！逃げるぞ！」

「は、はい！」

男のあとを追いかける、その姿は兎のような長い耳が頭から出た少女だった

「おのれ……」

男たちが逃げ出して暫くしたあと、男は立ち上がる

「おのれ……《ダイコク》！！」

その叫びは怒りに満ち、周りの木々を揺さぶった

「太陽……元に戻らないわねー」

アマテラスは暗くなった空を見上げて咳く

「早いとこ戻さないとな、生活が狂う」

ツクヨミが言う

「あなたは夜型でしょ？眠くならなくていいじゃない」

「逆を言えば眠れないんだよ」

あのフェンリル事件から数日、まだ太陽は戻らない

「こんなこと、前にもあったわね」

「ああ、スサノオの」

「なあ、その話は・・・」

かつて一つの事件を起こした。《天岩戸事件》である。アマテラスが閉じ籠り、太陽が隠れた。今はこうして出てきているが流石に反省はしている

「それよりさ、見てよこれ」

スサノオは新聞を見せる、一面には

『《アマツ》、ダイコクの土地を略奪。ダイコクは逃走』と書かれていた

「また戦争？懲りないわねえ」

アマテラスが煎餅をかじる

「無事なのかしらねえダイコクって人は」

「ダイコク、ああ、ダイコクね」

ツクヨミは何かを思い出したかのように言う

「有名な人？」

アマテラスが聞く

「何でも鮫に襲われてた兔を助けたんだってさ」

「優しいのね」

「あとは……むう、知らないな」

「ま、敗走兵が反乱を起こすのを恐れて血眼で探すでしょうね」

「ああ、だな」

「追手は来てないか……」

ダイコクは木にもたれ掛かり、息を整える

「……ダイコク様……私たちは逃げ切れるのでしょうか？」

因幡が不安げに聞く

「当たり前だ、因幡、お前の恩返しは俺を守るんだろ？」

「そうですが・・・あのアマツです。どんな手を使ってでもダイコク様を」

「ふっ、俺は只ではやられん、それに俺は行きたい場所があるんでな、それまでは死ねん」

「行きたい場所？」

「月だ、なんでも兎が餅を突いてるみたいだしな」

「月、ですか・・・」

ダイコクは再び歩き出し、近くの竹林まで来た

「ここは？」

因幡が高く伸びた竹を見上げて言う

「竹取ノ翁と言つやつは知ってるな？」

「あ、あの竹細工師の」

「そいつのところにな、突然現れた女がいる。そいつが目的だ」

「はあ」

何が何だか分からない、と言った感じだ

「まあいい、行ってみるか」

ダイコクは竹林に足を踏み入れる

因幡も黙ってあとを着いていく。しかしこの竹林は四方が竹で囲まれ、下手をすれば迷ってしまいそうだ。

「あの一、迷ってませんか？」

「ああ、迷った」

因幡は開いた口が塞がらなかった

「ななな、どうするんですか！このままでは飢えてしまいますよ！」

「まあ待て、こうしてな、竹に傷を付ければ・・・」

ガリガリと竹にナイフで傷を付ける

「こら！なにしとる！」

不意に声が聞こえた

声が出たほうを見ると一人の老人がいた

「ああ、よかった。ほんとに来た。俺たちはあんたの所に行こうとしたら迷ったんです、案内してくれませんか？」

「なんじゃ客か？タチの悪い妖怪かと思っただわい。着いてきなんせえ」

老人は振り返るとそのまま進んでいった

「あの、あの老人が？」

「ああ、竹取ノ翁だ」

翁のあとを着いていくと家に着いた

「あら、何処へ行ってたのですか？」

一人の若い女性が翁に言う

「ちいと竹が泣く声を聞いてな、行ってみればこやつらがいたんじや」

「ま、竹を泣かすなんて」

若い女性はダイコクを見る

「すまなかった、でもあれしか方法はなかったんだ」

「まあよい、ワシとてこの竹林は迷うときもある。して、用件はなんじゃ？」

「用件、ねえ・・・そこのお嬢ちゃんに話がある」

「なんじゃ！嫁にはやらんぞ！」

翁が怒る

「いや、そんな話ではなくてね。よろしいかな？」

「え、ええ……」

「因幡は来なくてもいい。竹細工でも見ていてくれ」

「は、はい」

そうしてダイコクと女性は竹林へ入って行った

「……あの、話とは？」

「単刀直入に言う、月に行きたい」

暫くの沈黙

そして女性が口を開く

「な、何を言ってるのかしら？月になんて行けないでしょ？」

さっきとは口調がまるで違う

「じゃあさ、月から来たお前はどっなんだ？」

「……あなた、何者？」

「天人ではないことは確かだ、《カグヤ》さん？」

「あなたは珍しいわね」

「何が？」

「今までは不死の薬を求めてきたやつばかりだったけど、天の羽衣を求めてくるなんてね」

「ああ、今は逃げたいんだ」

「でもダメよ、月の民にとってここは汚れた場所。そこに住む者を迎えてくれるはずがないじゃない」

「ま、そう簡単には行くわけないか」

「ええ、だから諦めてちょうだい」

「ああ、そうするよ」

「そっさい、ダイコクは来た道に戻る」

「あ、ダイコク様！」

戻ると因幡が竹で出来た水鉄砲で遊んでいた

「ありがとう、話は聞いた。それでは」

ダイコクが立ち去ろうとしたときだ

「待ちなせえ」

奥から老婆が現れる

「久しぶりのお客さんだ、泊めてあげようかね。辺りは暗いしね。よいだろ？じいや」

「あ、ああ。婆さんがそう言うなら・・・」

翁はカグヤを見る

「私は全然いいですよ？」

にこやかに答えた

「あなた、その縄は？」

翁の家に入り、一つの部屋にてくつろいでいるところ、カグヤが訊ねてきた

「ああ、これか？最近やりやったやつにやられてな」

体に巻かれた縄を撫でる

「この縄・・・注連縄ね。あなた妖怪？」

「いいや、違う。ただ単に力を封じ込まれたただけだ、失敗してるが」

「ふうん、傷だらけの体といい、殺し合いでもしてきた？」

「あれは向こうから攻めてきたんだ、まさか俺が負けるなんてね」

「あとその兎」

カグヤが因幡を指差す

「あれは？故郷にいた兎に似てるけど」

「ああ、あれはな。鯨に襲われてるところを助けた」

「へえ、妖怪に優しいのね」

「まあな」

「なに？それは本当か？」

アマツはその言葉に驚いた

「はい、確かにダイコクはそこにいます」

一人の少女が言う

「フハハハ！ならば早速行ってやろう、今度こそ決着だ」

アマツは立ち上がるとその場所へ向かった

「フフフ・・・」

その背中を不気味な声で少女は笑った

『第六章 怒りに触れて』

「太陽は相変わらずね・・・」

黒くなった太陽を見上げアマテラスは呟く

「こつも暗いと妖怪が厄介だな」

ツクヨミはアマテラスの隣に座る

「そうねえ、妖怪狩りをしてる人が少ないしねえ」

「天姉、月兄ー」

スサノオが二人を呼ぶ

「あら、昼食かしら」

「ああ、みたいだな」

食卓からいい匂いがする、二人は食卓に足を運び、スサノオの作った昼食を食べた

「ごちそうさま、美味しかったわ」

アマテラスがそういうとスサノオは照れ臭そうに顔を背ける
アマテラスにはその仕草さえ、いとおしく感じた。

「スサノオ・・・あのさ・・・」

アマテラスは息を荒くして何かを言おうとした

その時だ

「キヤー！」

外から悲鳴が聞こえた、何かと外に出てみれば喧嘩が始まっていた

「おい、やめないか！」

スサノオはその喧嘩を仲裁する

「ぐっ・・・スサノオさん、コイツヤバいですぜ」

殴られていた男が言う

「すまないな、ダイコクを探しに来たんだが口を割らなくて、つい」

「何がついだ、それにダイコクなんてここにはいない」

スサノオは言い返す

「君も隠すのか、まあいい。ここにいるはずだろう」

なんだコイツ・・・

スサノオは恐怖を感じた

「もしかしてお前はアマツ？」

「ふ、いかにも！俺はアマツだ！」

空が曇り、雨が降り始める

「さあ来い、少年」

「くっ……やるしかねーか」

スサノオは刀を抜く、殺すつもりはない。

スサノオは一步踏み出し、アマツとの間合いを詰める、しかし

バシン！

アマツとスサノオの間に雷が落ちる

「!?!」

不意を突かれたスサノオは立ち止まる

「はあ！」

そこにアマツが蹴りを入れる、スサノオはゴロゴロと転がり、腹を抑え立ち上がる

「な、んだよ……ありゃ」

「俺はアマツ……天を操りし者」

アマツがスサノオに向けて手を突き出す

ピシャァン!!

スサノオの目の前に雷が落ちる

「なるほど・・・天候を操るのか・・・」

「どうした？参ったか？」

くい、とアマツは手を動かす

ビュオ!

それに反応し、風が吹き荒れ始める。

「そら、早く降参したらどうだ」

「きゃっ」

アマツはアマテラスを背後取り、刀を首に向ける

「早くしないと血を見ることになるぞ？」

「んな!貴様!」

スサノオはその行動に焦る

「さあダイコクはどこだ?言え!」

「・・・ダイコク、ダイコクって・・・」

徐々に怒りが込み上げてくるのを感じた、それもそうだが、奴はいるはずのない者を要求して挙げ句の果てには人質も取る

突然、視界が暗くなっていく。スサノオは目眩なのかと思う

「こんなときに！」

視界は暗くなり、体が動かなくなる。この状況にスサノオは混乱する。

「ククク・・・何を慌てる？」

そんな混乱を破ったのはスサノオの声だった

(俺が喋っている・・・?)

それは確かにスサノオの声だった。だが、スサノオは一言も喋ってはいない。

「お前の怒り、良いものだったよ。礼だ。あいつを潰せばいいんだろ？」

スサノオの声でスサノオに話し掛けてくる。すると次に勝手に体が動く。まるで何かに乗れられたようだ

バツ！

スサノオの姿が消える

「！どこへ行つた！」

アマツがスサノオを探す

「ここだよ」

スサノオはアマツの背後に現れ、腹に刀を突き刺す。

「なんだあ？よええなお前」

「な、んだ貴様……」

（天姉に刺さるだろ！）

「安心しなあ、力加減は出来るさ」

ズプツと刀を抜き、付いた血を振り払う

「ぐっ……突然強く？退くしか……くそっ！」

アマツは腹を抑え、逃げていく

「ククク……アーハツハツハ！」

スサノオは高らかに笑う

（ありがとよ、さて元に戻りたいんだが）

「キヒヒ、戻りたいい？残念だったなあ！俺は久しぶりに出てこれたんだあ！もう少し楽しませてもらうぜえ！」

（なっ、何を！）

意識が薄れていく、だんだんと視界が狭まる、駄目だ・・・コイツは・・・

「スサノオ？大丈夫？」

アマテラスがスサノオに声をかける

「ああ、大丈夫だ」

スサノオは落ち着いた態度で答える、そして何処かへ行こうとする。

「ど、何処に行くのよ！」

「何処だろうな、取り合えず地獄にでも行くか？ははっ」

スサノオは笑ってみせると走ってその姿を消した

「な、何が・・・」

アマテラスはその場に立ち止まるだけだった

「アマテラス、怪我は・・・」

ツクヨミが膝から崩れたアマテラスの体を支える

「スサノオが・・・」

「ああ、だが今は無事なのを喜ぼう。スサノオなら大丈夫さ」

「……うん」

「ありやなんだろうね、突然人が変わったみたいに強くなった」

アマツのところにいた少女が物陰からスサノオの変貌の観察の感想を言う

「嫌な予感ね……」

そう呟くと少女は立ち去った

『七章 日の神は地へ』

あれから数日、ようやく騒動が落ち着いてきた朝

「スサノオー……」

アマテラスはスサノオを呼ぶ。しかし、しん、と家のなかは静まり返っている。スサノオが朝食を作る音もしない。

アマテラスは寂しさを感じた

「スサノオ……」

一体どうしたのだろうか、何か様子がおかしかったが。

「私が探すしかないようね……」

普段怠け者と近所に認識されているアマテラスがそう決意した

「まずはスサノオの特徴ね」

アマテラスは紙にスサノオの似顔絵を描き始めた

「おや、アマテラスさん」

暫く描いていると大天狗が来た

「また、来たの？まあいいわ、スサノオを見なかった？」

「スサノオさんですか？んー・・・」

大天狗は暫く考え込んだあと

「あ、確かあの山の方にいましたね」

大天狗はここから見える一際大きな山を指差す

「あっちのほうね・・・ありがとう」

アマテラスは立ち上がると大天狗が言っていたほうへと向かった

「やれやれ、駕籠でも拾えばよかったかしら」

思ったより遠い、アマテラスは額の汗を拭い、山を見る。少し大きく見える

「確かあの山の麓には村があつたわね・・・」

人は少ないが確かに村があることは記憶にしていた。何度か新聞で目にしたことがあるのだ

「誰もいない道を歩いていると向かいから一人の商業人が歩いていた」

「これはこれは珍しい、どこかへ行くつもりですか？」

気の良さそうな老人だ、アマテラスは

「ええ、ちよつとあの山に」

と目の前の山を指差す。すると老人は驚いた顔になり。

「いんや、やめておけ。あの山にや《鬼》が出る、こないだも何か大きな音が聞こえての、見に行ってみれば山に大きな穴が空いとつたんじゃ、鬼の仕業じゃ」

「鬼ですか・・・」

「ああ、その穴に入っていく人影を見たんじゃ、ありゃ鬼が新しい死体置きでも作ったんじゃろ」

人影……。望みは薄いがスサノオであることを願う

「んー、まあ気を付けますよ。じゃあ」

そう言いアマテラスは先へ進む

それから何分かすると村に着いた。この村は酒が美味しいことで名が知られている。ただ、あの老人が言っていたようにこの付近には鬼が棲んでいる。鬼の仕業で人がいなくなることもあるようで観光客は少ない。

村に入ると

「あ、見知らぬ人だ！」

子どもが指を指して言う

それからそろそろと村の人が現れ、物珍しげな視線で見る

「あ、あの・・・」

無言でじっと見つめられるのは辛い、アマテラスは取り合えず声をかけようとした

「おや、客か！珍しい！」

人混みを掻き分けて一人の青年が現れる、その肩には熊を背負っている。

「あ！《金太郎》！また狩れたの！」

子どもが嬉しそうにはしゃぐ

「おう、今日は猪も獲れたからな」

にっと歯を見せて笑う

「それはそうと、そこのお嬢さん」

「はい」

金太郎はアマテラスに声をかける

「せっかくだ、貴女も熊鍋を食べるといい」

「え、いいんですか」

ちょうど日が暮れ始めてきた頃だ。運がいい

「ああ、俺は《坂田金時》。よろしくな」

金時は手を差し伸べる、アマテラスは握手を交わす。
金時は鍋を用意する。といい、どこかへ行く

それに続き村人はぞろぞろとそれぞれの家に戻る

「私も何か手伝います」

ポーンと待っているのもあれなのでアマテラスは金時の手伝いをすることにした。

「んー？じゃあ火でも起こしてくれ」

ガラクタが転がる倉庫のなか、金時は鍋を探していた

「は、はい」

アマテラスは村の中心に集められた薪の所へ行くと火を起こし始める

「魔法でも使えたらなあ・・・」

などと呟きながら火を起こす

暫くして火が燃え上がり、火をじっと見ていたころ

「お、もう火が点いたか」

大きな鍋を持った金時が現れた

鍋を置き、水を入れると野菜やら熊の肉やらを入れ始める

「おーい！出来たぞー！」

金時がそう言うところぞろぞろと村人がまた出てくる

村人全員が鍋を囲み、食事をする

アマテラスは金時の隣に座り

「あの山に大きな穴があるのを知りませんか？」

「ああ、あるね。ただどうするつもりだ？」

金時は険しい顔つきになり、返事をする

「弟を探してるんです、もしかしたらその穴に」

「なるほど、だが、その穴がどこに通じるか知っているか？」

アマテラスは首を横に振る

「地獄だよ、死の国、とにかくヤバい奴らの巣窟だ。そんなところに弟さんを探しに行くのか？」

「そんな危ないところに行く弟を叱らないといけませんからね」

「ククツ、いい姉を持ったものだな、その弟も」

「ほんと、手間のかかる可愛い弟ですよ」

「よし、なら明日その穴に案内しよう」

「ほんとですか！ありがとうございます！」

こうしてアマテラスは金時の家に泊めてもらい、次の日の朝

熊鍋は・・・臭いこそ臭かったが味は美味しかった。

「よし、行くか」

金時が巨大な斧を担ぐと先を歩いていった

アマテラスはそのあとを着いていく、こうして山のなかに入り、穴がある場所まで着いた

その穴は崖にぽっかりと空いていた、巨大な穴からは風が吹いている

「行くのかい？」

「ええ、道案内ありがとうございました」

「そうか、行くのか。俺たちはこの穴を開けた奴にな。村の者がこの穴に入れば村を燃やす」と言われてさ、何か遭っても助けには行けねーぞ？」

「この穴を開けた奴って？」

「この先には地獄がある。そこの頭領、《ヤマ》だよ」

「ヤマ・・・」

一体どのような者だろう、何せ地獄の頭領というのだ、とても恐ろ

・ しいに違いない。そんな奴と何とか話合いで済めばいいのだが・

アマテラスは少し不安に思った、争い事は面倒である

「では、行ってきます」

穴に入る、辺りは暗く少し進むとどっちが下か上か分からなくなり
そうだった

暫くして、ふと後ろを振り向く

振り向いたところで闇が広がっているだけだった

「どこまで続いているのかしら」

先に広がる闇に問いかけるもその声は周りの壁に反響するだけだった

『八章 災いをもたらす者』

不気味な静けさに包まれた薄暗い空間

「へえ、これはまたなんのご用で？」

黒いローブを羽織い巨大な鎌を持った骸骨が言う

「いやだからさ、《火車》の面倒を見ると」

男がそう言う

「えー、ですが閻魔様、あつしは猫は苦手なんですわ」

骸骨はその命令をどうしても断りたかった

「なに言ってるんだ、《死神》のくせに、猫が怖いのか？」

閻魔様と呼ばれた男、この男こそがこの地獄の頭領、ヤマである

「いやあいつ、あつしを引っ搔くんですよ」

「骨しかないのに引っ搔かれてどこが痛いんだ」

「・・・心？」

「なに言ってるんだ、こつちは勝手に骨や死体を持って来られて困ってるんだ、頼んだぞ」

「へいへーい、善処しまーす」

めんどくさそうに死神は答えるとその場を立ち去る

「ったく、何でうちの手下はここまで働かないかね・・・」

おや、また来た

白装束を着た人たちがぞろぞろと現れる

「さてさて、仕事するか」

これらを裁く、これが私の仕事だ

「はいはい皆さん押さないで、並んで並んで」

どれだけ進んだのか、恐くなってきた

アマテラスは手探りで前へ進む、幸い入り組んではなく、ただ一本道が続くだけだった

「そろそろ着いても」

そういいかけたときだ

辺りが明るくなったかと思うと目の前には黒いローブに身を包んだ人がいた

「あの・・・ここって・・・」

「ん？ああ、地獄だよ」

振り向いたのは骸骨、アマテラスはぎよつとした

「ん、お嬢さんどこから来たんだ？三途の川を渡らずに来るなんて出来るのか？」

「あー、私は死んでないからね」

「ちよつとちよつと、死んでない？なら地獄に来る理由なんてないんじゃないの？」

死神は鎌を構える

「お嬢さん、ここに何をしにきた？」

「弟を探すためよ」

「弟だあ？確か突然男が押し掛けて来たと思えば倉庫に閉じ籠ってたな」

「なら、その倉庫まで案内してくれる？」

「無理だね、あつしは地獄の見張りを任せられてるんだわ」

「仕事熱心な死神ね」

「そりゃどうも、悪いけど出ていってもらっよー！」

死神は鎌を振り上げるとアマテラスに振りかざす

アマテラスはそれを横に避けると鏡を取り出す

「《ヤタノカガミ》よ！悪しきものを浄化せよ！」

鏡から光が発せられる

その光は死神の体を焼いた、死神はすぐにその場を移動する

「っと危ない！なんだ、地上にはあっしを倒すことが出来るのか」

「あいにく地上でも妖怪はうじゃうじゃいるものでね」

アマテラスは鏡を死神に振る

死神はその鏡を鎌で防ぐが

ジュツ

鎌は溶け始める

「なっ」

死神が驚き隙を見せたところに

「はぁ！」

ドス！

胴に鏡をぶつける

「ぐはぁ・・・」

死神は痛みに悶絶し、膝を付く

「私の勝ちね、さ、案内してちょうだい。その倉庫に」

「全く、閻魔様にバレたら叱られると言つのに・・・」

死神は愚痴を溢す

アマテラスはその死神の後ろを着いていく

「そうそう、一応言っておくけど案内するのは665階までだからな」

「それより下はなにかあるの？」

「666階からは《悪魔》の住みかだ、誰も入ろうとはしないね」

「行かないわよ、なるべく無駄な戦いは避けたいし」

「よく言うよ、本気であつしを消しにきたじゃないか」

死神の足が小さな倉庫の前で止まる

「ここに閉じ籠ったんだわ、じゃ、あつしはこれで」

「ええ、ありがとう」

死神は来た道を戻る

アマテラスはそれを見送り、死神の姿が見えなくなると倉庫の戸を開けた

なかは暗い、だけどそれはそこにいた

「スサノオ……！」

「アマテラス……」

ふらふらとこちらに寄ってくる

アマテラスは鏡を構えた

「予感はしてたけどあなたはスサノオじゃないわね」

そう告げると、スサノオはニイと笑い

「ああ、そつだ。俺はスサノオじゃあない。俺は《マガツチ》！」

「やな名前ね……スサノオを返してもらっわ」

「ほう、ならば俺を倒してみな、雛人形の一つでも気休めに持ってきたか？俺の厄は極上だぞ……！」

ゴウーと黒い覇気がマガツチを包む

「行くぜえ！『地震』！」

ドンー！

大地が揺れ、アマテラスの動きを止める

「『雷』！」

空に手を突き出すと雷がアマテラスに落ちる

さらに追い討ちをかけるように

「『火事』！」

どこからか現れた火がアマテラスを燃やす

「『おやし』！」

ゴウ！と竜巻が起るとその竜巻はアマテラスを襲う

「どうだあ！災厄のフルコースはよお！」

「・・・ぬるい、ぬるいわ」

平然とアマテラスは立っていた

「なにっ？」

「全く、こんなことになるんだったらあの事件のあとさっさと契りでも交わすべきだったわ」

「ハッ！姉弟で契りたあ、また面白い趣味を持つ」

「あら、私はいつでもいいわよ？」

「ククク・・・スサノオもこんな変態な姉を持って苦労してただろ
うな」

マガツチはアマテラスに飛び掛かり、拳をぶつける

しかしアマテラスはそれを避ける

拳は地面に当たり、クレーターを作る

「『サンライズナイト』！」

アマテラスが鏡を掲げると光が発せられ、その光はマガツチを焼く

「ぐう！『嘆け厄の神』！」

マガツチの影が独りでに動き出すと鏡から発せられる光を掻き消した

「まあ、私の光を消すほどの力を持つなんて」

アマテラスはニヤリと笑い

「ならこれで終わりよ、『天照大御神』！」

鏡を高く掲げるが何も起こらない

「ハッ！俺の闇ではその程度の光、無意味！『イビルナイトメア』
！」

黒いオーラを身に包み、突進してくる

マガツチとの距離があと僅かになったときだ

カッ！

鏡が光だし、マガツチは動きを止める

「例え光を失っても私自身が太陽、光は消えない！」

「ぐっ！ぎゃああああ！！」

スサノオの体から黒い影が飛び出る

「ちい！これがアマテラス！」

その影は逃げていく

「スサノオ！」

ぐらりと倒れそうになるスサノオをアマテラスは支えた

まだ息はある。眠っているようだ

「よかった・・・本当によかった・・・」

アマテラスは優しくスサノオを抱き締めた

それから、二人はヤマのところへ行き、地上へ帰してもらった

「よかったですね、閻魔様」

死神が遠い目で言う

「なにいつてるんだ、お前が弱いからこんなことに」

ヤマは死神を説教する

「こりゃ、火車！引つ掻くな！」

そんなことも気にせず火車と戯れる男が一人

「おい《ハデス》、お前からも言ってるやってくれよ、もっと鍛えるべきだって」

ヤマが言う

「いや、いいよ。どうせ俺なんかより弱いやつはいないさ」

ため息混じりにハデスと呼ばれた男は言う

「やれやれ、相変わらずのネガティブだな。って死神！どこいった」

ヤマの意識がハデスに向いている間に死神は逃げたようだ

「ああ、また俺のせいで死神が・・・」

さらに暗くなるハデスの頬を慰めるように火車は舐める

「ああ、優しいなお前は」

ヤマはこの場を離れた、ハデスのネガティブはどうにかしてほしいところである

「・・・さて、私もそろそろ・・・」

ニヤリとヤマは笑い、地獄を歩く

『九章 蛇の子鬼』

「おや、これはこれは旅の者」

村に戻ったアマテラスは村人たちに礼を言って回った

しかし一人がいない。そう金時がいないのだ

「あの、金時さんは？」

「あんれ？そついやお前さんを案内してそれきりじゃの」

老婆はそう言う

「まさか山に住む鬼に！」

青年が言った

「いんや、ありえん。金時はこの村を鬼から守ってくれた。金時に限ってそんなことは……」

老婆は首を降って否定する

「でも最近はこの山に《茨木童子》が帰ってきたみたいだし……」

「なんと！もう帰ってきたと言っのかえ、ああ恐ろしや」

「あの……茨木童子と言っのは？」

「ああ、茨木童子と言つのはこの辺りの山を統べる鬼の頭領さ、前まではどこかに出掛けてたようだけど」

青年は不安を隠せない表情をしている

アマテラスがその山に金時を探しに行こうと思ったときだ

バサバサと伝書鳩がアマテラスの肩に止まる

アマテラスは伝書鳩の足に結ばれた紙を広げて読む

「ツクヨミから？」

『アマテラスへ

時間が無いので簡単に説明する。太陽が隠れたことを機に鬼たちがこちらに迫っている。出雲村の皆はこちらに避難させた。早く帰ってきてくれ』

「そんな・・・」

「天姉、急ごう」

「スサノオ、まだ安静にしてたほうが・・・」

「もう大丈夫だ、それより、早く」

「う、うん」

アマテラスは頷き、早々と帰ることにした

「金時さんは、必ず見つけ出します!」

そう村人に告げると走り去った

「ツクヨミ!」

「アマテラスか!無事だったんだな!」

「鬼たちは!?!」

「ゆっくりだが確実にこちらに迫っている、何故だかは知らない」

「何が目的で……」

「ああ、俺かもな……」

スサノオが痛む頭を押さえて答える

「俺が、マガツチが、あいつの山を荒らしたからかもしれない」

「それだけでこれまでに発展するのか……?」

ツクヨミが鬼たちがいるであろう方角を見て呟く

「とにかくだ、まずは鬼退治」

スサノオが前が出る

「スサノオ!? 無茶よ!」

アマテラスが止めるが、スサノオは構わず進む

「くそっ、あのバカ」

ツクヨミが追いかけてようとする

「やめときなよ」

そのツクヨミを止める声が

「オモイカネ・・・」

ツクヨミはオモイカネを睨む

「あいつに任せなよ、なんたってスサノオだからねえ」

「傷を負った状態で無謀では無いのか?」

「ええ、無謀よ。だけど鬼の狙いはスサノオ。彼が行かなきゃ無駄な死者が出る」

「何か出来ることは無いのか?」

「無いね、八意の知恵を持つ私でも彼にやってあげるとは思いつかない」

森に入った、何体もの妖気を感じる。
そこらに鬼は潜んでいるようだ。

スサノオは息を整えながら森を歩く。
いつ鬼が出るか。

確かこの先には広い丘があるはず、大群で来たのならそこだろう。

草木を掻き分け、ようやくと森を抜ける。

遠くには予想通り鬼の大群が見えた。

「何が目的なんだよ……」

俺のせいでみんなの命が危ない、それだけは嫌だ。

スサノオは刀を抜き、鞘を捨てる。

「おおおお!!」

叫び、スサノオは鬼の大群目掛けて走り出す。

「ん、来たね」

赤髪の鬼が呟く。

遠くに人影が、あれは恐らくスサノオだろう。

「父ちゃんから聞いて、気になったから調べてみたけど……父ちゃん
が気に入るほどの猛者……には見えないね……」

「しかし、姉御、たった一人とは言え進軍命令ないんですか？」

「ああ、いい。通して」

「なっ……」

側近の鬼は驚きを隠せない。

赤髪の鬼はすくつと立ち上がり、スサノオに向かって歩いていく

「あ、姉御！何考えてはるんです！？」

「私は彼によろぎがあつたんだ。村を攻めるわけじゃない、騙してすまなかつた。みんな、茨木童子」

その言葉に鬼はざわつく

「私はただ、あの男がどれほどか知りたかつただけなんだ、ま、酒でも呑んで見ていてくれ」

「し、しかし姉御！怪我でもしたらえらいことですよ！」

「もう遅い、すぐそこまで来た」

スサノオは高く跳び、赤髪の鬼に斬りかかる。

しかし鬼は僅かに体を反らし、それを避ける。

スサノオは素早く飛び退き、間合いを取る

「君がスサノオか……」

「ああ、そつだ」

「父ちゃんから気に入るほどの力・・・見せてくれよ？」

父ちゃん？スサノオはそれに疑問を持つ、何か心当たりが・・・

子ども・・・

八首の蛇の影が頭を過る

「まさか・・・」

赤髪の鬼はニヤリと笑い

「そう、私はヤマタノオロチの子！《酒吞童子》！最強の鬼！」

やはり、まさかここでヤマタノオロチの子どもが現れるとはスサノオは思いもよらなかった

そして絶望もしていた、あの強さのヤマタノオロチの子、果たして勝つことは可能なのか？

「行くよ！」

ふらりとスサノオに近寄り、拳を握り締める

スサノオは刀を振るが拳が腹に入るのが早かった

「!？」

その小さな体のどこにそんな力があるのだろうかと思うほどの力だった。

スサノオは空に打ち上げられる。

なんとか体制を整える。

刀がない。

見ると酒吞童子が刀を眺めていた。

「んー・・・刀に秘密があると思ったんだけどなあ」

などと呟いている

「返す」

そう言い刀をこちらに投げ返す。

スサノオはその刀を掴み、落下する勢いにまかせ、刀を酒吞童子に叩きつけた。

「・・・甘い、何が気に入ったんだろ」

酒吞童子は僅かに体をずらし、刀を避けていた。

スサノオが刀を引き抜こうとすると。

ガッ

酒吞童子は刀を踏みつけ、動かなくなる。

そして

ドッ

渾身の蹴りがスサノオに入る

スサノオはゴロゴロと転がり、呻き声をあげる

「・・・なんだ、弱いじゃん」

がっかりだ、と言わんばかりに溜め息をつく。

酒吞童子はスサノオを見下ろし、
もう伸びたのか？
と突っついていてる。

ぞくり

酒吞童子が嫌な寒気を感じる
ブオン！

その時には視界に空が写っていた

「へえ、私に一撃を当てるなんて」

足が痛む、どうやら足払いをされたようだ

スサノオが酒吞童子を見下ろす
その目は怒りを表していた

「なるほど、いい目、確かに父ちゃんが気に入るわけだ」

よっと立ち上がると茨木童子に合図をする。
茨木童子は瓢箪を投げると酒吞童子はその蓋を開けて中に入っているものを呑む

酒吞童子の顔が赤くなる、瓢箪を茨木童子に投げ返し。スサノオに向かう

「さあて、私もちよいと本気を・・・」

ひつくとしゃっくりをする。その足取りはふらふらと、そう酔っている。

「私の酔拳を見な！」

殴りかかるが、スサノオはそれを見て避け、刀を振る。だがふらりとゆったりした動きで刀を避ける

「ほい！」

拳を顔に

「はい！」

また顔に

「ほあたあー！」

力を混めた拳が顎に入る

意識が飛びそうになるが耐え、刀を振る

しかしふらりと避けられる

そして拳を入れられる

何度も刀を振るがゆらゆらと煙のように読めない動きにスサノオは惑わされる

「ちい！ちよこまかと！」

力撒かせに刀を叩きつける。

それを見た酒吞童子が渾身の力を混めた拳を飛ばす

しまった、と思ったがすでに遅い。

拳が顔に入ろうとするとき

「なりません！」

どこからか声が聞こえた

『九章 蛇の子鬼』(後書き)

誤字、脱字等あれば教えてください。

『十章 迫る危険』

酒呑童子の拳がスサノオの鼻の前で止まる。

声が出たほうを見てみるとそこには一人の赤と白の袴を着た少女が一人。

「その方をここで殺させるわけにはいきませんよ！」

少女は木刀で酒呑童子に殴りかかる、酒呑童子はそれを拳で打ち返しながら後退する。

十分間合いが開いたところに少女はスサノオのもとに帰ってくる

「なんだお前は、見たところ人間だが・・・」

「私は鶴野ツルノ 清香キョウカ！あなたがスサノオさんですね？」

「ああ、そうだが、しかし何をするつもりだ？人間が鬼に敵うとでもいうのか？」

「分かりません！ただ私は多少妖怪に対抗する能力はありますよ」

数枚の札を少女は取り出し、木刀に付ける

「この木刀は悪しきものを抜けます！」

そっぴい酒呑童子に向かって走り出す

「何を考えてる？人間！」

酒吞童子が拳を地面に叩きつける、すると土が盛り上がり、清香を空へ打ち上げる。

すぐに酒吞童子は追い討ちをかけるように跳ぶ

「墮ちろ！」

拳が清香に当たる時

バチ！

静電気に触れたような音がなり、酒吞童子は飛び退く

「結界・・・？妙な技を」

少し焦げた拳を撫でる

「へへっ、婆ちゃんほどじゃないけどね！これぐらい出来るよ！」

得意気に言ってみせる

「無茶するな！命が惜しくないのか！」

スサノオは叱るが

「私はスサノオさんが死ぬのが怖いんですよ」

なんだこの娘は、とスサノオは呆れた

「まあいいか・・・君の強さも分かったし、今は帰るとしよう」

酒吞童子はめんどくさそうにその場を立ち去る

「おい！撤退や！帰るで！」

茨木童子は鬼に命令し、酒を片付けて酒吞童子のあとを追いかける。

「追い返しましたね・・・」

清香はふう、とため息

「ああ、死を覚悟してたがな」

「そうだ、アマツが攻め込んだとき。なんだか様子がおかしかったけど大丈夫なんですか？」

「ああ、いろいろあったが今はな・・・なぜアマツのことを？お前は村にいたか？」

ギクツと清香はなる。アマツをスサノオにけしかけたのは私自身、それがバレれば厄介なことに

「た、たまたま見たんです！」

とつさに嘘をつく、こうでもしなければ次は失敗する。

次は・・・あの方たちをこの方と戦わせて・・・

「どうした、戻らないのか？」

少し遠くにいるスサノオが振り返り言う

「あ、あ！行きますよ！」

清香はそのあとを追いかける。

あの方たちとスサノオさん……どっちが上かしら……

「しかし……西方に来いと清香なる女は何を考えている……」

男が清香から来た文を読み、言う

「さあね、でも君が考えてる計画ならどちらにしろ西方に行くですよ？」

小さな子どもが鉄で出来た輪を布で磨いている

「まあ……それもそうか。では行くか、我々“諏訪”の強さを世に示すために」

「やれやれ、私の土地を奪っておいてまだやるの」

「まあそう言うな《モリヤ》よ。ぬしこそそんなことを言うなら私から奪い返してみせよ」

「勝ち目のない戦いはやだよ」

モリヤは悔しそうに顔を背ける

「準備はよいな？慌てることはない。ゆっくり確実に西方に向かおうぞ」

「へえ、清香ちゃんかー」

アマテラスは清香はまじまじと見つめる

「あ、あなたがあのアマテラス様・・・！」

尊敬の眼差しを向ける、そこまで天姉は有名だったか・・・？

「あなたは何をしてる人なの？妙な術を使うそうだけど」

「えっと、私はその、巫女をやってるんです」

いつの日か聞いたな、北の方に巫女という聞き慣れない職業・・・
こいつのことが

「巫女？知らないわね・・・」

アマテラスは頭を抱える

「私は知ってるが」

オモイカネは得意気に威張る

「え……なぜ？」

まるで知らないのが当たり前のような反応だ、俺も知らないが

「私はオモイカネだよ？」

「あ、ああ！なるほど」

なにがなるほどなのか理解出来なかった。

確かにオモイカネは知識人だ、ただ彼女がその知識をどこで得たものかは誰も知らない

「しかし、どうするんだ？」

スサノオはアマテラスに聞く

「え？うちに住まわせるわよ、可愛いし、なんだか懐かしいし」

なにが懐かしいのか分からないが……

「ほんとですか！？ありがとうございます！」

「……何を企んでるか知らないけど、アマテラスだけには危害を加えないでね？」

オモイカネが清香に耳打ちをする。

清香は恐怖した、まさかなにかを企んでいることがバレているとは・

・

オモイカネはニツコリと笑い、その場を立ち去った

「あはは・・・」

清香は乾いた笑いしか出来なかった、恐ろしく怖い、神の怒りがこれほどまでに怖いとは・・・婆ちゃんの怒りのほうがマシだと思っただけだ。

「しかし、巫女なんて聞いたことがないな・・・どこから来たんだ？」

「う・・・それは・・・」

私は確かにどこから来た、それを言ってもいいのか、悩む

「ええ、私はその・・・」

「スサノオ！ご飯まだー？」

アマテラスがスサノオに抱き着く

「分かった！作るから！」

そう言い二人は家に戻る、清香はそのあとを追いつける。故郷を少し思い出した、幼馴染みのあの子に吸血鬼・・・

それより今はあの方たちがこちらに向かっているはず、どちらが私に相応しいか・・・相応しいほうを連れて帰れば婆ちゃんも・・・

『十一章 清香の企み』

目の前に料理を並べる。

天姉に月兄、そして清香が座っている。

どうも慣れない、というか好きになれないのだ清香は

何を考えているのか分からないし変に俺を慕うところも怪しく思える、言ってしまうえば俺は彼女に怯えている。

いつ首が飛ばされるかと警戒しつつ料理をテーブルに置くと椅子に座る。

いただきます。と皆声を揃えて言うつと夕飯を食べ始めた。

天姉は彼女のことを気に入り、月兄は相変わらずの楽観的警戒しているのは俺だけとなる、何だか恥ずかしい。

「これ、とても美味しいです！」

清香は味噌汁の感想を言ってくる、その目に偽りはない。

「あ、ありがとう・・・」

例え嘘でも美味しいと言われるのは嬉しい。

「うん、あいつが作る味噌汁なんかより断然いい・・・」

清香はぶつぶつと呟いている、しかしこの娘、何か違う。人間であることに変わりはないが何か・・・

「スサノオ」

そう言えばこの娘、どこから来たかと問えば何か隠すように・・・

「スサノオ！」

考えはツクヨミの声で消される。

「な、なに」

「醤油」

ふと手元を見ると醤油が傾いたまま、冷奴にかかっていた。

「あわわ・・・」

慌てて醤油を置く、黒い池に浮かぶ白い冷奴だ。

「あ、そうだ。これ食べたらお風呂お願いね」

天姉が平然とお願い事をしてくる。

「分かったよ」

天姉はほんと家事をしない、俺は呆れている。

それから夕飯を食べ終わった皆はそれぞれやりたいことをやり始めた。

俺は風呂場を掃除している。
ふと背後に何かの気配が。

「何のようだ」

振り返らずに聞いてみる、すると

「スサノオさんは家事全般を任せられているんですね」

「その声は清香か」

しかし振り返る訳にはいかない、振り返った瞬間、胸を刃物で貫かれないとも言いきれない。

「私は、婆ちゃんに褒めてもらう為にここに来たんです」

「へえ、どこから」

俺は掃除の手を休めずに返事をする。

「それは・・・その・・・スサノオさんも行くことも出来る所です」

「どこだそこは」

やや呆れ気味に答える、まあ黙々と掃除するよりはいい。

「お、オモイカネさんなら知ってる筈です。彼女の知恵なら恐らく・・・」

「そうか、また聞いてみるよ」

よし、掃除は終わった。あとは水を沸かすだけだな。

「巫女、というのは何をやるものなんだ？」

「巫女ですか・・・神様に仕える役目があります」

「神様・・・ねえ・・・」

ん、確か俺は神様だったな。と言うことは。

「つまりなんだ、巫女と言うものは神の世話をやるもの、だったかな？」

少し思い出した、巫女。懐かしいな、そう言えばいたな。

「なるほど、よく分かった」

スサノオは薪を入れ、火を着ける。

「俺はお前を警戒してたな、すまん」

流石に警戒しすぎていた、それがかつて俺たちに仕えていた者だったとはな。

「風呂が沸いたら先に入ってっけてくれてもいいぞ」

スサノオはそう告げるとオモイカネの家に向かった。

「あら、珍しいわね」

彼女の家は相変わらず本に囲まれた家である。いつも座りっぱなしで本を読んでいるようだが一応寺子屋の教師をやっている。

「清香のことなんだが」

「ああ、やっぱり。彼女がどこから、どんな方法で来たか、でしょ？」

言い当てられてしまったので頷く

「教えてあげる、でもこれは本当のことよ」

そう言うとオモイカネはゆっくりと話始めた

「清香、彼女が来た所はこの世界ではない、別の世界よ」

「別の世界・・・」

いわゆる異世界か

「そして彼女がどうやって来たかは分からないけど、鏡ね。私の部屋に鏡があるのは知ってる？」

結構前になるが、古ぼけた鏡が置いてあったのを覚えている

「あの鏡は扉みたいなものなのよね、たまにあの鏡に見たことのない世界が写るの」

「そんな鏡が・・・」

にわかには信じがたいがオモイカネが言うには本当のこと

「その鏡は私のところだけじゃなく色んなところにあるはずだわ」

そこまで言うとオモイカネは黙った、どうも俺と話すときは口数が減るのである。

「ありがとう、疑問が無くなった」

そう礼を言うと自宅に戻ると、清香が風呂に入り終えていたので風呂に入り、眠ることにした。

翌朝、目が覚めたスサノオは朝食を作り。アマテラスを起こしに行った。次に清香が起きる、スサノオがいないことを確認すると計画を練り始めた。

彼らのことだ、大勢で攻め入るはず。そして彼らとスサノオが戦うように仕向ければ・・・

相変わらず悪巧みだけは得意だな。と少し笑ってしまう。

そうしているとスサノオとアマテラスとツクヨミが来た。四人は朝食を食べ終わり、アマテラスは自室へ、ツクヨミは縁側に猫と遊びに、スサノオは食器を片付けていた。

そして昼頃。

そろそろ来るだろうと清香は待ち望んでいた。

かなり強いと噂されている神たちだ、これで婆ちゃんも・・・

「あいや、すまぬ」

突然一人の男に声をかけられる。

「はい？」

「なんだ、お客さんか？」

スサノオが奥の方から現れる

「私はミナカタと申す

「なんで大勢で来なかったんですか！」

名を聞いた途端清香は彼に耳打ちをする。

「清香なる女にここに来るように言われたのでな」

「だからって一人で来ることは！」

「一人ではない。モリヤが子どもと遊んでおる」

「そうじゃなくて・・・」

はあと落胆する清香を見て、ミナカタは何か分かったのかニヤリと
笑い

「ほう、さては私たちと戦いを起こさせたかったようだな？」

「なんだって？」

スサノオが反応する。

ああ、失敗だ。どうしよう

「どうやら真のようだな。何が目的が分からぬが私は私自信の意思で戦うことが好きなのだよ」

「清香ー！どういっつもりだ！」

スサノオは怒鳴る。すみませんー！と清香は謝り続ける

「ハツハツハツ、だが私たち諏訪の力を世に示す為。アマテラス殿と一戦交えたいのだがな」

「私かなに？」

アマテラスがゆっくりとミナカタに歩み寄る

「そなたがアマテラスか、噂通り美しいこと」

「それはどうも。でもね、私は極力戦いは避けたいの。帰ってもらえるかしら」

「それは困る、私たちは遙々東の方から来たと言っのに」

ミナカタはパチンと指を鳴らす。するとモリヤがこちらに走ってきた

「戦わないと気が済まないようね・・・」

アマテラスは鏡を構える

「アマテラス殿、そなたの力、どれ程か見せてもらおう」

清香は結果オーライと内心笑っていた、しかしミナカタとモリヤとアマテラス。この戦いはどうなるのか、ワクワクしていた。

「ハッ！」

アマテラスが鏡で攻撃する。だが何処からか現れた蔓により、鏡は塞がれる

動けないところをモリヤは鉄輪を振り回す、しかし距離が届かず転ける

「何をしておる。早に立て」

ミナカタは蔓を操り、モリヤを立たせる

「部下使いが荒いのね、涙目じゃない、その子」

「彼女は一度負けた。力は私が上。ただそれだけだ」

アマテラスは無理矢理鏡を引き抜き、飛び退く

「昼ご飯も食べたいし、終わらせるわよ」

鏡を頭の上にかがけ

「ヤタノカガミよ！その光を持って我に勝利を！」

鏡が光ったかと思うと光線がミナカタたちを包んでいた、しかし、

その光は掻き消される。

「流石アマテラス殿。僅かながら防ぎきれませんでした」

「！なっ」

アマテラスの手足は蔓によって縛られ、身動きが取れなくなる

「悪いねっ！」

モリヤは鉄輪を重たそうに引きずりながら走り、アマテラスに向けて鉄輪を振り回す

「きゃあ！」

鉄輪を受け、アマテラスは見事に吹き飛ばされた

「・・・我々の勝ち。ということでしょうか？」

そう言うとミナカタたちは立ち去る。スサノオはアマテラスに駆け寄り、怪我はないかと聞く。

「無いわよ、ただ強いわね。彼ら」

「あ、そうだ。清香！」

そろりと逃げようとしてた清香を呼び止める

「お前は何を考えているんだ！」

「その・・・」

清香は計画の全貌を話した。要約すると一番強い神を連れて帰り、お婆さんに認めてもらう。という計画だったそうだ

清香は反省したのか元いた世界に帰ろうとしたが、アマテラスがそれを引き留める、なぜここまで清香に執着するか

そんなこともあり、清香はもう暫くここに居座ることになった。

『十二章 地獄篇』

地獄

そこにヤマがいた。

「さあ、機は熟した！地上を我々の物にしようぞ！」

高らかに叫ぶ。オオオオ！と様々な妖怪が雄叫びを上げる

「貴様も来い、金時」

ヤマは自分の後ろで縛られている金時に言った

「てめえ！何のつもりだ！」

「分からないのか？貴様は地上を手に入れる為の駒の一つになってもらうのだ」

「地上を手に入れるって・・・地上のみんなはどうなる！」

「どうなるも何も抵抗するなら殺すだけだ」

「っ！てめえ！」

殴りかかりたいところだが体を縛り付けられている為身動きが出来ない、そんな金時を見てヤマは鼻で笑い

「行くぞ」

そう言い地上へ向かう、死神は縄を引つ張ると金時を引きずって行った

地上ではいつも通り平和な日常が繰り広げられていた。

「いや、ですからいらなのかなと思って・・・」

「いるよ！だから井戸で冷やしてたんだよ！」

清香とスサノオが喧嘩をしている。原因は羊羹、井戸に吊るされていた羊羹を清香はいらなと思い食べてしまったのだ。そんな喧嘩を微笑ましく見守るのがアマテラス、母も私とスサノオが喧嘩している姿を見るのもこんな気持ちだったのだろうか、と思う。

「仲がいいわね、ほんと」

「全くだ、騒がしくて眠れん」

ツクヨミが欠伸をして言う

「アマテラス、清香が言う別の世界とは知っていたか？」

「ええ、知ってたわ」

「やれやれ、流石はアマテラス。何でもお見通しか」

そうしている内に二人の喧嘩が殴り合いに発展したのでツクヨミとアマテラスはその喧嘩を止めに行った。

「やれやれ、あんたたちは子どもだね」

アマテラスはその後、二人を説教していた。ツクヨミは縁側で昼寝をしている。

アマテラスが説教していると、急に辺りが暗くなる。

「アマテラスさん！大変です！空が・・・！」

一人の男が慌てた様子で駆け込んで来たのでアマテラスは外に出て、空を見上げる。

「まあ！何事・・・」

空は黒い雲に覆われ、暗い昼をさらに暗くしていた。

「太陽が弱くなっていると言っている・・・」

そして、向こうから何かが来る、それはヤマだった。アマテラスは何故ここに来たのかと思った。

「あら、これはこれは地獄の皆さん、何かご用ですか？」

「おお、いつぞやの女、ここにいたか。なに、地上を我が物にしようとな。その道中に貴様らがいただけだ」

「へえ、聞き捨てならないわね」

「だと思ったよ」

「さっさと地獄に帰りな！」

「地獄の王に楯突いた罪！いまここで裁いてやる！」

何事かとスサノオが表に出てみるとヤマとアマテラスが争っているではないか。

しかし何故、こんな大群を連れて。

「あの、あれは？」

「分からん、ただ地獄にいる奴らだ」

「あの服装からして閻魔ですね、どうして……」

「あれが地獄の王……」

「やるわねあなた！」

アマテラスはなかなかの相手に喜びを感じていた。

「ふ、お前こそな！地上は強いやつが揃っているようで安心だよ！」

ヤマは飛び退くと

「地獄の王、ヤマ・ラージャがこの罪に裁きを下す！」閻魔ジャック
シメント『！』

凄まじい衝撃波がアマテラスに走る、しかしアマテラスはそれにヤ
タノカガミを向ける

「ヤタノカガミよ！私の障害となるものを跳ね返せ！」

衝撃波はヤタノカガミに当たるとその勢いを増し、ヤマを襲う。

「っ！？なあっ！」

その早さに驚き、衝撃波を食らう

「私の勝ちね！」

「くくっ、残念だな……」

黒い影が人混みのなかから現れたと思うと

「なんだお前は！」

スサノオに襲いかかっていた

その影の攻撃を防いだスサノオは、押し返し、刀を構える。

「ああ、君は不幸だ……」

だらんと倒した上半身をゆっくりと起こしながら、彼、ハデスは言った

「こんな俺に負けるんだ……君は運が悪い……だけど俺のほうが不幸だ……」

なんだこの男は……暗い気しか感じない。どんよりした雰囲気は

スサノオの闘争心を萎えさせつつある。

「どうしてくじ引きなんかで決めたんだ……」

ぶつぶつと何かを呟いている。

「ハデス！愚痴はいい！早くやれ！」

そんなハデスを見てヤマが言う

「ああ、そうだね……分かったよ、運が無いのが悪いんだね、兄さん……」

ハデスはゆっくりと剣を構える。いつでも斬りかかる隙はあるがこのどんよりした雰囲気、気が進まない。

「でも兄さん……くじ引きで決めるのはいくらなんでもないよ……」

ダッ！とハデスは走り出す、が決して早くは無い。

スサノオはタイミングを合わせて刀を振り、ハデスに傷を負わす

「ああ、痛い……痛い……」

「ええい！埒があかん！火車を出せ！」

同じようにして黒い影がハデスの足元に現れる、それは一匹の黒猫だった。

「ああ、火車か・・・俺と一緒に戦ってくれるのか？」

火車はニヤーと一鳴き、そして体を丸め、こちらに飛び込んできた。その体には炎が灯り歯車のように回転している。

スサノオはそれを避け、避け際に一太刀入れる、が対したダメージではないようだ、火車はUターンすると再びこちらに転がってきた。スサノオはまたそれを避ける、すると火車は止まることなく、ハデスに衝突した。

「ああ、運が無い・・・」

そのままハデスと火車は気を失った。コントのような戦いが終わる、するとヤマが

「おのれ！次だ！死神！奴を出せ！」

人混み掻き分けて現れたのは

「金時！」

アマテラスが叫ぶ。そう、坂田金時だった。しかし様子がおかしい、人形のように生気が感じられない。

「さあ！坂田金時よ！《ヘル》様に力を示すがよい！」

「ヘル？それは誰だ？」

スサノオは当然の疑問をぶつける。しまった。とヤマは口を押さえる。なるほど、ヘルというのが黒幕か

「私が、やるわ」

清香が前に出る

「何を考えてる、バカか」

「あの人、スサノオさん達の知り合いですよね」

少なくともアマテラスはそうだろう。

「なら本気で戦えないじゃないですか」

「それもそうか・・・」

「任せて下さいな、婆ちゃんとの争いで鍛えてますから」

すっ、と息を吸うと

「宝棍に宝塔！毘沙門天様！私に力を！」

お祈りか、とスサノオはつつこむ

「行きますよ！」

清香は金時に突っ込む、金時は斧を振り上げ、迎え撃とつとする。
清香が十分近づき、金時が斧を振り下ろしたときだ

「危険神！『スサノオ』！」

その時、清香はあり得ない動きをする。一瞬で金時の背後に回る。しかし危険神とはなんだ危険神とは、とスサノオは言う

「不運の土着神！『モリヤ』！」

くると一回転すると清香の手にはモリヤの鉄輪が、その鉄輪で金時を攻撃する、金時は吹き飛ばされる、そこに追い討ちをかけるように清香が走りだし

「これでお仕舞いです！暖かき太陽神！『アマテラス』！」

カツと鉄輪が光ったかと思えば金時はその場に倒れ、気を失った。

「こんなものですねっ」

「なんだよ！すげーじゃんお前！」

戦いもろくに出来ない小娘かと思っていたが

「な、なんてことだ・・・し、死神！」

ヤマは振り返るが死神の姿はない、逃げたのか

「お、おのれ！」

すると急に空が明るくなる、見上げると太陽があった。今まで黒くなっていたと言っのにどうしたのか

「な、太陽が・・・？まさかヘル様！」

何か嫌な予感がしたのかヤマたちは戻って行った

「よかったー・・・」

清香が安心しきった顔で言う

「ええ、よくやってくれたわ」

アマテラスは清香の腰に手を回し、耳元で囁く

「流石清香ね、かつこよかったわ」

ハアハアと息を上げている、相変わらずの変態な姉でスサノオは呆れた、しかしなぜ太陽が戻ったのか、ヘルがどうのこうの言っていたが・・・

『十三章 蜘蛛の糸』

スサノオらがヤマたちと戦いを繰り広げている頃

地獄。

「裳抜けの殻、か」

地獄に一人、初老の男が一人

「しかし彼女を葬るなら今が好機……」

初老の男、オーディンは単身地獄に潜り込んでいた。目的はフェンリルの復活と同時に復活したヘルである。

「しかし地獄の奴らはどこへ……これなら《テュール》に任せるとだっただな……」

そう言いつつオーディンはヘルがいるであろう場所へ向かう。そして一つの大きな門に辿り着く、そしてその前には狼が、間違いない、ここにヘルがいる

オーディンが門に近づくと狼は起き、唸り声を上げる。オーディンが構わず進もうとすると襲いかかってきた

「ふんっ！」

オーディンは飛びかかる狼をグングニルで防ぎ、振りほどく

「《ガルム》よ……相変わらず門番の仕事はするのだな」

どちらが動くか、お互いにまるで隙はない。ただ、お互いじつと見つめあっているだけなのである

ピクツ、ガルムが僅かに体を震わせた

ドッ！それをオーデインは見逃さなかった、グングニルをガルムに投げつける、グングニルはガルムを貫き、門に突き刺さる。

ガルムは息絶え、オーデインはグングニルを抜くと門を開いた。むせかえるような血の臭い、間違いない、彼女がいる。

真つ暗な空間に蠟燭の火が灯る。目に映ったのは血の池、そこに沈められる人々、そして一人の女が佇んでいた

「あら、遅かったわね。ヤマたちはとっくに行つたわよ」

半死半生の彼女、ヘルは爪を弄りながら言った

「死に損ないが、貴様を葬りに来ただけよ」

ヘルの髪が逆立つ、顔はとても恐ろしく変わり、体は肉が落ち、骨が見える。

「いいだろう！私も貴様を殺し、地上を我が物にしたくてな！」

ヘルは氷の息吹を吐く、その息吹は軌道上の全てを凍てつかせながらオーデインに迫る、しかしオーデインは驚きもせず、グングニルを投げた。

グングニルは氷の息吹を突き破り、ヘルに突き刺さり、壁に刺さり身動きを取れなくする

そこにオーデインは蹴りを入れる、ゴキツと首の骨が折れる音がした。ガクンと頭を垂らしたヘルだったがすぐにこちらを睨み、その

鋭い爪でオーディンを切り裂く。オーディンはそれを避け、避け際にグングニルを引き抜く。

「おのれオーディン！妾に傷を！」

怒り心頭のヘルはオーディンを睨む、しかしオーディンは動じない。何故ならこの戦いの勝敗は目に見えているからだ。明らかにオーディンが強い。

ヘルもそれを知っていた、明らかかな力の差、絶望的な戦い。ヘルは知っていた。

「妾はヘル！地獄の女王よ！」

そう高らかに叫ぶ、しかしドスツとグングニルが胸を貫く、だんだんと視界が狭くなるのが分かる。ヘルはその場に倒れ、絶命した

「完全なる死だ、よかったな、ヘルよ」

オーディンはグングニルを引き抜く、そしてヘルの亡骸を蹴る。ゴロゴロと転がった亡骸は血の池に沈んでいく。

そして、池の中央辺りにある、蜘蛛の糸を掴むと登り始めた。

暫く登ると地上に出た、明るい。どうやら太陽が戻ってきたようだ。しかし地獄の奴らはどこへ行ったのか、結局分からなかった、ただヘルが死んだことで戻ってくるかもしれん。帰るか。

「残すはあと一体・・・」

そう呟き、その場を後にした

『十四章 Unknown』

今、私のまえには圧倒的な力を持つ敵がいる。

「まさか、追われている貴様らを助けた恩をこんな形で返すとはな」

敵はニヤリと口元を歪める。

「あんたに助けて貰った恩は忘れてない、けど、あんたのやり方は気に入らない」

「俺のやり方に文句があるのか。・・・例えばだな、一生懸命積み木で作った家があるとす。その積み木の家を壊すとす、次はまた同じものを作るか？」

「それは、また別のものを作るわ」

「ああ、そうだ。俺はそれを促す為に壊す、奴らはそれに気づかず俺のことを悪く言うだけだ」

「つまりあなたは無理矢理にでも進化を求めろのね」

「ああ、そうさ。いつまでも同じ積み木の家を見るのは飽きるだろ
うっ」

「そう、飽きるのが嫌だからみんなを・・・」

私の頭には死んでいく人々の顔が蘇った。私は目の前にいる敵を許さない

「まさか仇討ちでもするつもりか？この、『悪魔の王』と恐れられる俺に！」

「ええ、相討ちでも構わない、あんたを殺す！」

「相討ち？ハハハ！たかが吸血鬼がこの俺に相討ちだと？笑わせるな！」

敵の目には怒りが宿っている、私は恐れることを忘れた、とにかくこいつだけは許さない。怒りしかなかった

「おおおおああー！」

私はその鋭い爪で敵に斬りかかる。敵は私を見る、その時だ。ボンツと爆発音が聞こえたかと思うと羽に激痛が走る

「うぐっ……」

激痛に耐え兼ね、その場につづくまる。敵はそんな私を見下し

「哀れな吸血鬼だ、貴様の妹も似た感じなんだろうな」

「っ！貴様あ！」

それはもはや反射だった、私は敵を切りつけていた。敵の頬から血が出る、敵は私の頭を踏みつけると髪を引っ張り、顔をこちらに向けさせた

「不意打ちとはいえ、この俺に傷を負わすとはな……本当はこの

ままお前の頭を壊してもいいところだが・・・なんせ俺に傷を負わしたんだ、お前の記憶を破壊してやるよ」

すると敵は少し目を見開いた、すると段々と意識が薄れていき、視界が暗くなる。このまま意識を失えば何かを失う、そう感じたが、逆らう術はない。

「・・・・・・・・ユ・・・・・・・・ナ・・・・・・・・」

私は最後に　　大切な・・・・・・・・誰かの名を呼んだ・・・

どさり、と目の前で吸血鬼が倒れる、彼はそれを見るとため息をつく

「ふん、なかなか面白かったよ。この玩具」

頭を軽く蹴ると、さてどこに捨てるかと悩む

「ああ、この近くの森にでも捨てておくか」

彼は吸血鬼を抱き上げるとその森へ向かう

「・・・破壊こそ創造なのだ・・・どうしてそれが分からん・・・」

彼は理解されない苛立ちを呟く

すぐ近くにある森に到着すると無造作に吸血鬼を投げ捨てた、ここには妖怪が蔓延る、ちょうどいい餌だろう。

彼が森をあとにして暫く経ったとき

「・・・・・・・・ん」

彼女は目を覚ました、キョロキョロと辺りを見渡すと木々が立ち並んでいる、ここは森のようだ。
ふと異変に気がつく、名前やその他、自分に関することが思い出せないのだ。

「私は・・・？」

謔言のように呟くがダメだった、思いだそうとすれば頭痛がする。
自分が誰だか分からない不安に彼女は泣き始める。その泣き声に辺りから妖怪が集まってくる、妖怪に囲まれた危機的状况に恐怖し、更に泣く。

「なんだ、吸血鬼？珍しいね」

ふと声がある、顔を上げてみると何もいない、周りに異形の妖怪がいるだけである

「私の家まで運んでて」

そんな声がすると妖怪たちは私をどこかへ運び始めた。運ばれた先は森のなかにある小さな小屋だった。なかに入れられた彼女は何をされるのかビクビクしていた。

「ああ、怖がらないで」

フツと目の前に妖怪が現れる、優しく微笑んでいる妖怪は私の傷の手当てをしている

「あ、あの・・・あなたは？」

「んー？私？私は《鶴》。ここ辺りに渡ってきた妖怪さ」

「鶴……」

「よし、手当て完了！怪我してたようだけど何かあったの？」

私は眠っていた以前のことを思い出そうとした、が何も思い出せない、ただ暗い虚無が広がっているようだった。

「覚えてないの？じゃあお名前は？」

「名前……」

「まさか……記憶がない？」

私は頷いた、すると鶴はあらら、と言う

「ま、いいや。よく分からないもの同士仲良くやりましょ」

鶴は私に握手を求める、私は彼女の手を握った　　暖かい。その暖かみに触れていると何か懐かしいものを思い出す。

「ユナ……」

「ユナ？」

「え？や、誰だろう……」

本当に誰なのか、大切な人だった気がするが

「ふうん、ま、いいや。しかし吸血鬼がやられてるなんて珍しいね」

「吸血鬼・・・？」

背中の羽に触れる、自分は吸血鬼なのだと認識した。なぜ私はあの森で　何か嫌な奴に

「《ブラフマー》様！どうにかならないのですか！」

一人の人間が涙を流しながら言う

「ふむう、何とかしたいのは山々なんじゃが・・・相手が相手だからのう・・・」

ブラフマーと呼ばれた老人は髭を弄りながら言う

「ですが！早くなんとかしないと、この世界が！」

「全て壊されかねんな、じゃが奴は気が触れている、下手に刺激するのは・・・」

「ですが！時間が経てば無駄に犠牲が出ます！」

「しかし・・・創造神のワシに何が出来るのか・・・」

「それは・・・」

人間は俯く

「むう、何かアイデアを考える。ワシは暫く、そこらの森でも散歩しようかの」

森に着くとブラフマーは頬に付いた傷跡を撫でた

「さて、どうするか・・・オモイカネ殿に知恵を借りるか・・・？いや時間がない」

ふと地面を見ると足跡がある、人の足跡は森の奥へと続いているようだ

「妖怪・・・？これはまた厄介な」

放っておいて被害が出てはいけないとブラフマーはその足跡を辿っていた。すると古い物置小屋が見える、明かりが灯っているところを見るとなかに誰かいるのか

ブラフマーがその小屋に近づいたときだ。

「ヒョーヒョー」

悲しげな鳥のような鳴き声がある。

「・・・トラツグミか・・・」

しかしそんな鳥、この辺りで見た覚えはない、すると

そこまで思考を巡らせたときだ、何処からか竹槍が飛んでくる。ブ

ラフマーはそれを避けると辺りを見渡す、姿はない

「……出てきてはどうだ、ワシは別に争いに来たわけではない。
鵜よ」

次は岩が落ちてくる、しかしそれは分かっていたこと。ブラフマーはひょいと避けると小屋に向かって走る。

「待て！」

ブラフマーの目の前に一人の妖怪が現れた

「鵜がそう簡単に姿を現していいのかね」

「黙れ！あの娘を危ない目には負わせない！」

「ほう、その小屋にはそれほど大切な人が」

「そ、創造神がこんなところになんの用かしら？」

鵜は相変わらずブラフマーを睨み付けている

「そう構えるでない。ワシは争いを好まん」

「な、ならその傷はなんだ！」

ブラフマーは顔に付いた傷跡を触る

「ああ、これは少し我が儘でどうしようもない友人が付けてな」

「戦いで付いた傷跡ではないんだな」

鵜はようやく構えるのをやめた

「ふむ、そうじゃ。してその小屋にいる人は怪我でもしているのではないか？」

「怪我はもう大丈夫だけど・・・」

「何かあったのか？」

「・・・記憶が・・・無いようで」

「ふむ、記憶喪失とな」

「こちらです」

ブラフマーは鵜に案内され、小屋に入る。そこには一人の吸血鬼がいた

「お・・・おお・・・貴女は!」

ブラフマーは目を見開き、吸血鬼を見る

「知っているんですか!？」

「戻ってこないと思ったら・・・まさか奴にやられたのか」

「奴・・・?」

吸血鬼は首を傾げる、彼女は以前ワシに奴に復讐すると言って……死んだのかと思った

「……あいつに……一発やってやりましたよ……」

吸血鬼はぼそりと呟く

「あ、あれ。何か思い出しそうな……」

吸血鬼は頭を抱える

「貴女の名前は《ユリック》。どうじゃ、何か思い出したか？」

「ユリック……私は……確か……あいつに……」

「ああ、そつだ。復讐すると言って……」

その時だ、一羽の梟がブラフマーのもとに飛んでくる。その足には文が巻かれていた、ブラフマーはその文を受けとり内容を読む

「なんと……奴がもう動きだしたか……」

ブラフマーは鵯に向き直ると、少し彼女を借りるといい。連れて帰った。

「さよなら吸血鬼さん、短い間だったけどね、きつと記憶も戻るわよ」

鵯はユリックの姿が見えなくなるまで手を振った

『十五章 破壊神』

ある日、一つの山が一夜にして消えた。スサノオはその原因を突き止めるべく大天狗を訪ねた。すると昨日の晩、消えた山の付近に西方の神がいた。と

（何故西の神が山を・・・）

スサノオは西方に向かいながら考えた、しかし理由が分からない。その時だ、ドン！と爆発音が聞こえたかと思えば音のしたほうから煙が上がっている

「なんだなんだ、嫌な予感だな」

その方向へ歩みを進めた

その頃、ブラフマーたちは、爆発音を聞き、急ぎその方向へ向かっていった

「間に合ってくれ・・・！」

爆発音が聞こえた場所に着く、そこで目の前に広がる惨状にブラフマーは言葉が出なかった。一つの村が奴により破壊され、生きていたものは全て死に絶えていた。

「お、おのれ・・・」

ブラフマーは久しぶりに怒りを感じた。握り締める拳が震える。ユ

リックを置いて先に行くことが得策、だが彼女を一人にするのは

「なんだよこれ・・・」

そのとき、向こうから一人の少年が現れる、そうだ彼に頼もう。

「その若いの！すまんがこの娘を暫く預かってほしいんじやが」

「え、ええ・・・」

少年は戸惑いながらも頷いた。よしこれで先に行くことが出来る、早くしなければ

ブラフマーは彼女を彼に預けるやいなや先へ進んだ。

スサノオは困惑した、突然この娘を預かってくれと言われたから無理もない

「どうするか・・・なああんた名前は？俺はスサノオ」

「私？私はユリック・・・らしい」

らしいとはどういうことか、しかし見た感じこの娘は吸血鬼か。珍しいな

「ま、いいや。それはそうとこの惨状はなんだ」

「これは・・・あいつが・・・」

「あいつ？」

「分からない・・・覚えてないの」

「そうか」

さっきの老人を追いかければ答えに行き着くだろうとスサノオはユリックを連れてブラフマーを追いかけた。

「ようやく追い詰めた、さあ大人しく独房に入ってもらおうかの」

ブラフマーは目の前にいる男にいう

「クククッ、誰がまた地下深くなんかに入るかよ」

男は振り返らず言う、「ここで逃がしてはいけないとブラフマーは必死だった

「ならばなぜこのようなことをする」

「何故か？それはな」

男はゆっくり振り返る、その顔は笑っていた

「俺が破壊神だからだよ！積み木の家を壊してまた新たに別のものを作らせる！それをさせたいんだ！」

「なるほど、だがそれは創造神であるワシに任せな

」

その言葉は、男が突き刺した三又矛により遮られた

「ヒヒヒッ、無駄なものを創る貴様には言われたくないな」

男の目は狂気に満ち、ブラフマーを睨んでいた

「貴様……」

そのままブラフマーは倒れる、男は止めに三又矛を高く上げたときだ

「待て！」

スサノオがそこに入ってきた

「なんだあお前……お前も俺の敵か？」

「目の前で殺されかけてる奴がいたら助けるだろ！」

「キヒッ、ジジイの次はお人好しかあ！！」

ゾワッ。スサノオは彼の目を見た途端、寒気がし、思わず飛び退く

「お前は下がってる、こいつはヤバイ……」

冷や汗を拭いながらユリツクに言う、ユリツクは頷き、少し離れる

「オメーは……ケツ生きてやがったか」

彼はユリツクを見て言った。生きてやがったか？つまりこいつは彼女を殺しかけた？ますます危険な奴である

「さあ来いよ！遊んでやる！どれぐらい丈夫なオモチャか

」

彼がそこまで言ったと同時にスサノオは斬りかかった。彼はこの不意打ちに驚く。体に傷を負わせたが、浅いようだ

「アハハハ！また不意打ちか！だけどな、俺はこの程度じゃあ壊れやしない！破壊神、《シヴァ》！その暴虐の限りを尽くす力に恐怖

」

同じようにスサノオは話の途中にシヴァに斬りかかる、シヴァの体からは血が飛び散る

「うわあああああ！！！」

突然シヴァは発狂する、よろよろと立ち上がるとスサノオを睨む。その目は恐ろしく感じ、思わず顔を背けた

「壊してやる！この悪魔の王を知らない馬鹿に俺の恐ろしさを！」

シヴァの目が僅かに光る、そして

ドオン！

突然の衝撃、スサノオはゴロゴロと吹き飛ばされる。一体何がと見てみると、土が抉れていた、先ほどの爆発だろうか

「ちい外した！」

シヴァは三又矛を構え、こちらに走ってくる、迎え撃とつとこちらも構えるがあその目が恐ろしく立ち竦んでしまう

「うらああああー!!」

シヴァは渾身の力を込め、三又矛を突き出す。スサノオは体を反らし、間一髪避ける。

ボンッ!とまた爆発が起きる、今度はスサノオの真下が爆発したようだ、スサノオは吹き飛ばされ、木に叩きつけられる

「うぐ……」

全身を襲う痛みにも悶えながらもシヴァを見る、何かあの目に秘密がある筈だ

「もう壊れたか？」

とシヴァはスサノオの襟を掴み上げる

「まだまだよ!」

刀をシヴァの左肩に振り下ろす。間合いが広い槍のシヴァには防ぐことが出来ず、左肩から血が出る

「ぐう……フフフ、ハハハ!久しぶりだ!ここまで楽しい遊びは!《イザナギ》以来っ!」

イザナギ、その名前にスサノオは聞き覚えがあった

「お前、なんて言った」

と慌てていたときだ、いつか見た異形たちが集まってきた

「やれやれ、困った人たちねえ」

鵜がいた、鵜は異形に彼らを運ぶように命令し、異形はそれに従った

「生きててよかった、記憶は戻った？」

「それが・・・あまり・・・」

まだぼんやりとしか思い出せない、ただ私はシヴァを殺そうとして
振り返りに合い、記憶を失った。ただユナは誰なのか、まだ思い出
せない

「ユナ・・・」

もう一度呟いてみる、だけど何か思い出しそうでも思い出せないむず
痒さが残った

『十六章 雷神』

体のあちこちが痛む、俺は目を覚ました。綺麗な白い煉瓦造りの部屋だ。その部屋のベッドに寝かされているようで隣にはシヴァがいた、どうやら助かったらしく、あれからユリックが助けでも呼んだのだろう。俺はグルリと部屋を見渡し、起き上がるうとした。

「っ……」

腹に痛みが走る、ああそうだ、シヴァの三又矛か

「まだ起きてはダメですよ」

一人の女性が入ってきた、常に笑顔な女性は食事を持ってきた

「私は《ヴィシュヌ》、この度はシヴァがご迷惑をお掛けしてすみません」

深々と頭を下げる、俺は慌てて頭を上げるように言う

「あ、あの。俺の近くにいた女の子は……」

「ああ、彼女はブラフマーといるわ。どうやら記憶喪失のようだけ
ど」

「そのブラフマーさんは無事ですか？」

「ええ、ピンピンしてるわ。貴方たちより重症なのにな」

ヴィシユ又は心配そうに言う

「やっぱり心配だね。ごめんね、ちょっと見てくる」

といい、食事の乗ったお盆をテーブルに置くと部屋を出た

「さてどうするか・・・」

しかしお腹が減っているのもある、食べてしまおう

「なんだ、飯か？」

隣からシヴァの声が聞こえる

「ああそうだ」

「よこせ」

それが物を頼む聞き方かと言いたいが怒らせたくはない、飯ぐらい楽しく食べたいので渡す。よく焼けたクロワッサンにジャムを塗り、食べる。パンなどいつிரাইか

「ジャムよこせ」

「自分で取れよ!!」

思わず言ってしまった

「ちっ、うるせーな。夜雀かよ」

と言いながらもシヴァはジャムを取りに来る

「妖怪と一緒ににはされたくねーな」

「そんなに妖怪を毛嫌いするもんじゃねーよ」

「お前も以外に優しいんだな」

「なっ……」

シヴァは黙りこくった、なんだ照れているのか？

竹林、そこには竹細工職人の翁が住み、カグヤ、ダイコク、因幡もそこいた

「雷がスゴいな」

ダイコクは雷が鳴る方を見ながら言う、晴れているのに雷とは

「くわばらくわばら、ねえダイコク」

カグヤが因幡と鞠で遊びながら言う

「なんだ？」

「見てきて頂戴よ、何があるのか」

「何でだよめんどくさい」

「いいじゃない別に、住まわせてるんだから」

それを言われたら仕方がない。あれから俺たちはここに住んでいる、戻ろうにもアマツに土地を奪われ帰る場所もない。ダイコクは雷の鳴る方向へ向かった

「せいやー!!」

男は大木へ自分の体をぶつける。ピシャン!!とその度に雷が落ちる。雷はこの男が原因である

「しかし、また稽古か。そんなに面白いか相撲とやらものは、《タケミカツチ》殿」

そんな男に言うのはツールであった

「ああ面白いとも!そしてリベンジするためさ!タケミナカタ殿に
」!

「ほう、では俺は何をすればよい」

「オーデインから休みを貰ったのだろうか?茶でも飲んでけ」

「茶か、お前たち、東方の者はこんな苦いものをよく飲める」

「ははは、そちらこそ珈琲なんぞ苦いものを」

そこにヒタヒタと一人の妖怪が現れる

「やあ、来たよ、ミカヅチ」

「ほう《河童》とは珍しい」

トールは少し驚き河童を見る

「おや！龍之介殿！一戦どうだ！」

「いいね！やろう！」

と言うと早速相撲が始まった、雨が降り、雷が轟く。トールはさぞ迷惑そうに屋根の下に入る。そして二人がぶつかると、それだけで辺りに雷が落ちる。トールは呆れていた。しかし何故気にならない、それにこんなにも周りに被害が出ると

「おい！お前だな！この雷は」

ほら来た、厄介なことになったな

まさか相撲でここまでの被害とはな。ダイコクは二人の相撲に啞然としていた

「おい！聞いて・・・ないな」

やれやれと手を振る

「お前も大変だな」

「お前こそな」

「俺は、トール。オーデインに仕える者だ」

「俺はダイコク」

「ダイコク？お前がダイコクか」

やはりアマツの一件でそれなりに名は知られているようだ、何だか複雑な気持ちだ

「不幸であつたな」

「ああ、この注連縄も外れないしな」

体に巻かれた注連縄を撫でる、これのせいである程度の方は封じられている。困ったものだ

一際大きな雷が落ちると、辺りは静まり返る。土俵を見れば河童とミカツチが仰向けに倒れ、笑っている

「今回も引き分けだな！」

とミカツチは言う

「ああ！そうだね！」

と河童が言うと起き、帰っていった

「やい貴様、お前が雷の原因か」

ダイコクが言い寄る

「なんだ！挑戦者か！？」

「ああ、そうだな。少しばかり痛い目みてもらおうか」

「なんと！相撲ではないか、別にいいが」

ミカツチは石ころを拾う、そしてバチバチと右手に雷が走る

「どこの誰だか知らんが俺に決闘を申し込むとはな！」

バシユン！一瞬、雷が光ったかと思うと石ころがこちらに放たれた。ダイコクは体を反らせ、石ころを避けると一気に踏み込み刀で切りかかる。

「ふんぬ！」

ミカツチが地面を激しく踏みつける、すると雷がミカツチの周りに落ち、ダイコクを遮る。再び石ころを広い、右手に雷を走らせる

「妙な技を使うな、流星は雷神、雷の扱いには慣れている」

「ふふ、しかしこの『電磁加速砲』を避けられるとは思わなかったぞ」

「よくは分からんが電気を使った大砲か、火薬を使わなくて済む」

またミカツチは石ころを撃ち出す、ダイコクはそれを避け再び近寄るが雷を落とし、行く手を遮る

そんな繰返しの戦いをトールは眠そうに眺めていた、こつも進展しない戦いは飽きる。だがミカツチの防御は完璧、自分でも破ることは困難だと思う。ただ、何か策はあるのだろうか？ダイコクと言う男、先ほどから何か探っているように見えるが

「どうした、息が上がっているぞ！」

「へっ、大したことねえよ！」

段々と動きが鈍ってきたな、早く決着を着けねーと・・・あの電磁加速砲とやらものをまともに受けてしまえば終わりだ直感で分かる、あれはマズイ。ただ策は一つある、攻め入れれば奴は雷を落とす、ならば

「りゃあああ！」

ダイコクはミカツチに突っ込む、ミカツチがタイミングを合わせ、雷を落とそうとしたときだ。ピタッとダイコクは足を止める。しまったとミカツチが言うが襲い、雷が落ちると同時にダイコクは切りかかる、そして

「参った！いやあお前さん強い！」

ガハハ、とミカヅチは笑い、茶を飲む

「笑っていただけるか、見る辺りが滅茶苦茶だ」

トールは呆れた顔で言う

「いやいつものことよ！気にすることはない！」

「それはそうと雷はなんとならんのか、恐ろしくて落ち着かない」

ダイコクはミカヅチに言う、ミカヅチは茶を一口啜り

「そうか、迷惑だったか、すまなかった。これからは気を付ける」

「ああ、よろしく頼むよ」

そう言うとダイコクはその場を去った、これでカグヤも満足であろう

『十七章 妖怪の総大将』

暗い暗い森、そこに一人の老人とヤマタノオロチがいた

「ひよひよ、そのスサノオとやら神を痛い目に遭わせればワシらの名譽よ」

老人は髭を撫でながら言う

「まあそうだが、上手くいくかね？」

「ひよっひよっ！ワシを誰だと思つとる？」

「はいはい、妖怪の総大将さん」

「分かつとるではないか。ではワシは奴に文でも書こうかの」

といい老人は筆をとり、文を書き始める。

何か策でもあるのだろうか？あれほどまで自信たつぷりなのは見たことがない。

ヤマタノオロチは酒をくいと呑むと老人をじつと見た。いかにも弱そうである、だがこんなやつが妖怪の総大将とは。

「ひよひよ！出来た！ではお主には悪いがスサノオはワシが倒すのでのー」

「お前に出来るのか？」

「ワシを誰だと」

「分かつてる分かつてる！妖怪の総大将、《ぬらりひょん》だろ」

「ひよひよ！そう、このぬらりひょんに勝る者など」

やれやれとヤマタノオロチは頭を掻く、長話しが始まった。

「ひゃっほう！私の勝ち！」

清香が手を広げて喜ぶ

「あら、でも二番着は私が安定ね」

笑顔だがその心には闘志が宿っているのが分かる。負けていられない、スサノオは緊張した。

さて、俺たちが何をしているのかというと双六をしている。これがなかなか面白くて何度目か、そして俺の最下位も何度目か。

結果は俺が最下位、天姉が二位、月兄が三位となったところで双六は終わる、天姉はぐうたらと縁側で昼寝。月兄は寺子屋にいるオモイカネに会いに行った。清香はと言うと

「おまつ、俺のかすていら！」

「一片残ってたから要らないのかと思って」

「いるって！なんで遠慮とかしないのさ！」

「私は強欲ですからね」

「酷い女だ」

こんな感じである、まあ仲良くやっている。

「そっぴやあの雷は静かになったな」

「あ、そう言えば」

ここ暫く雷が凄かった、天姉が言うにはタケミカツチなる人物の仕業だと言っていたがどうなのだろうか。

「でも今日も平和ですねー」

清香は伸びをする、何とも呑気なやつである

「ああ、平和だな」

ヤマタノオロチ、オーディン、アマツ、マガツチ、酒吞童子、ヤマ、色々あった。そう言えば金時は元気で行っているだろうか？

「んー、私は妖怪でも懲らしめに行こうかなー」

そう清香は言うとな家を出た、あいつもここに来て結構経つ、家族の

者は心配しないものか？

「いや平和平和」

村を歩きながら清香はあくびを一つ

「あ。あなたは」

そこに大天狗が現れる

「あら、何かしら？私とやろっつてことかしら？」

「いやいやいや！ちょうどよかったです、これ、スサノオさんに渡すように言われました」

と大天狗は一枚の封筒を渡す

「手紙？まあ渡しておくわ」

「ありがとうございます、では」

といい大天狗は飛び去った、さて何の、誰からの手紙かと封筒を見るが宛先も何も書いていない。疑問に思いながらも清香はスサノオに渡すため家に帰ることにした。

「あの一・・・」

家に戻った清香は玄関の前を掃除していたスサノオに声をかけた

「ん、なんだ」

「大天狗から手紙を渡すように言われたんですが・・・」

「なに、手紙？」

スサノオは手紙を受けとると封を切り、中を読む。何度か頷き、手紙を閉じる

「何だっ たんですか？」

「なんか出雲村にある広場に来てほしいとき、なんだろ」

「はあ、出雲村ですか」

「んー、まあ行くだけ行ってみるか」

「はい、気を付けてくださいね」

「ん、じゃ行ってくる」

刀を持ち、出雲村へ向かった。

そして出雲村に難なく着いたわけだが。ヤマタノオロチの騒ぎのあと。ここにも人が増えたな。スサノオは混雑する道を歩き、クシナダの店へ行つた

「懐かしいな」

立ち寄りたいが今は広場に行こう、この先にあるはずだ。

心地よい風が吹く、ただ広い場所に着いた。いや、ここはヤマタノオロチと戦つた場所だ。しかし何故ここに呼んだのか。

・・・あれから数分後、いっこうに手紙の主は見当たらない、イタズラか。帰るとするか。と戻ろうとしたときだ

「イデッ！」

何か壁にぶつかった、しかし何も見えない。だがスサノオはそれが何か知っていた。

「いてて・・・なんで《塗壁》が・・・」

「ひよっひよっ、何故だと思つ？」

背後に声がする、スサノオはそちらを向くとそこには小さな老人が一人いた

「お前か、手紙を送ったのは」

「ひよひよ、左様、ワシが主を呼んだ」

「目的はなんだ？」

「なに、少しばかり痛い目を見てもらおうかなと」

スツ、と老人が手を上げると周りから妖怪が現れ、逃げ道を阻む

「なるほど、挑戦状か」

「ひよひよ、なに、殺しはしない。ただ我々の名誉にしたいだけよ」

「ふん、老人に何が出来る！」

スサノオは刀を抜き、間合いを詰め切りかかる。だが老人はひよいとそれを避ける

「老人ではない、ぬらりひよんじゃ」

ぬらりひよんはスサノオを蹴り飛ばす。スサノオは転がり、妖怪の壁にぶつかる

「おいおい、まさかのぬらりひよんかよ・・・」

ぬらりひよんは妖怪の総大将と聞いている、どれほどの強さか・・・

「チツ、負けるかよお！」

「ひっ」

ぬらりひよんは小さく悲鳴を上げる。なんだ、睨んだだけだぞ？

「おおおお！」

雄叫びをあげ、切りかかる

「ひ、ひい！」

ぬらりひよんは驚き飛び退く。なんだ？さっきから、まるでビビり・・・

まさか

スサノオはぬらりひよんは睨んでみせる。するとぬらりひよんはガタガタ震え始めた、それでスサノオは確信した。こいつ弱い、と

「じゃあ！行くぞ！つらあ！」

そう叫び、ぬらりひよんに向かって走る

「ひいい！」

ぬらりひよんはあわてふためくが、ニヤリと笑った

スサノオはそれに気づき、足を止める

「ひよひよひよ！行け！《ダイダラボッチ》よ！」

突然辺りが暗くなった、まるで雲に太陽が隠れたように。スサノオは空を見上げる

「あ・・・あ・・・」

それを見て声が出なかった。そこには山のように巨大な一つ目の巨人、ダイダラボッチがいたからだ

「ひよひよひよ！やってしまえダイダラボッチ！」

ダイダラボッチはゆっくりと顔を動かし、スサノオをその一つ目で見る。それだけでスサノオは震えた、勝てそうにない。これにはスサノオは直感的に思った

逃げようにも足がすくむ、冷や汗が頬を伝う。ダイダラボッチは高く拳を上げ、そして

ゴッ！

思いきり叩きつけた。しかし、その拳はスサノオを襲うことはなかった。

「ひ、ひいい！な、何するんじゃ！」

拳はぬらりひよんの近くを叩きつけていた、何が起こったのか、理解出来ない。仲間割れだろうか？

「その辺にしとおけ、ダイダラボッチ」

どこかから声が聞こえた、その声を聞くとダイダラボッチはゆっくりと拳を持ち上げ声のする方を向く

スサノオとぬらりひよんはその方向を見た。次々と妖怪が道を空け、一人の人影が現れる

「お、お主はあ！なぜここに！」

ぬらりひよんは驚きの声を上げる

「なんだ、俺がいちゃマズイのか？」

スサノオはその男を見た途端、身の毛がよだった。禍々しい妖気、巨大な力を感じた。

「いやすまないね、ぬらりひよんが迷惑かけて」

その男はいつの間にかスサノオの目の前にいた

「・・・！」

スサノオは声が出なかった、ただ驚きに体を強ばらせる

「いやいや、争うつもりは無いよ。無意味な戦いは嫌いだね、それじゃ俺は引き返すよ」

男は立ち去ろうとする、スサノオはそれを引き留めた

「あ、あの！名はなんと？」

「名？名か………《山本五郎左衛門》だ」

そう言うと山本五郎左衛門は歩き始める、その後ろを妖怪たちとぬらりひょんが着いていく。その姿が見えなくなりスサノオは膝をつく。

「山本五郎左衛門………」

体が震える、戦わなくてよかったとスサノオは心底そう思った。彼には絶対に勝てない、それだけ分かった。もしかすると天姉も苦戦するかもしれない、そんな相手だ。

「い、いや。まずは帰ろう………」

震える足を叩き、出雲村へ戻り始めた。

『十八章 神の川流れ』

震える足で出雲村に戻り、クシナダに挨拶をし、自宅へ戻った、あの恐ろしい存在は寝て忘れよう。

ある日

「最近なにか嫌な予感がするよね」

天姉が呟く

「見には行かないぞ」

スサノオはめんどくさそうに言う、いやめんどくさいんだ。

「じゃあ私が行って怪我してくるわ」

「それは止めてくれ」

天姉が怪我だなんて考えられない。

「じゃあ行ってきてちょうだい」

「はあ、何処に行けばいいんだよ」

「ほら」と天姉は川を指差す。

「あの川の下流のほう、そこから何かを感じるわ」

「いやあの川は・・・」

あの川には余りいい噂がない。とくに下流のほうは。

「あなたなら問題ないでしょう?」

「むう、わかったよ」

俺はその川に沿って下流を目指した。

あれから暫くした、川は森のなかを通り、スサノオは森を渡っていた。

「ちょっと待ちな!」

不意に声が聞こえる、そのほうを見ると一人の河童がいた。

「なんだ、相撲はやらないぞ」

「こつから先は危険さ!なんかでっかい馬を見たんだ!」

「はあ、でっかい馬・・・」

「そうさ!あれはミカツチ殿との熱き試合を終えてから帰る途中

」

なにかいい始めたのでスサノオは先を通ろうとした。

「待てー！行くな行くな！行くなら僕が相手だ！」

「はあ、河童は川に流されてる」

「何だと！なんならこの川を逆流させて君たちの住んでる場所を荒らすことも出来るんだぞ！」

「それは聞き捨てならないな、懲らしめてやるう」

刀を抜くと河童に斬りかかった。

「ひいい！」

河童は悲鳴を上げるとスツと姿を消した。

「やれやれ、今度胡瓜持つてくるからよ」

刀を鞘に仕舞うと再び進み始める。

・・・後ろ！

背後に何かの気配を感じ、蹴りを入れる、何も無い空間に何かがいる、それはギャツと悲鳴を上げ姿を現す。河童だった。

「なんて厄介な奴だ」

「ぐぬぬ・・・姿を消しても見つかるなんて・・・分かったよ！君なんてでっかい馬にやられちゃえばいいんだ！」

そう言うと河童は立ち去った。

「はあ、やれやれ」

さらに下流に向かうにつれ、段々とどんよりした空気になるのを感じた。

「なんだ、ほんとに何かあるのか」

その時だ

「オオオオ！」

何かの唸り声が聞こえ、森のなかから巨大な馬が現れる。

「ハロー！ やっぱり来たねスサノオ君！」

その背中に乗っている男が言う。

「なんてものを作ったんだ・・・」

「どうだ？ 素晴らしいだろう？ 僕が作った《クアドリガ》は！」

「やれやれ、そのクアドリガで何をするつもりなんだ？」

「それはね！ この僕、《アポロン》の名をもっと広める為さ！」

「別にいいだろ、何でもお前、向こうじゃあ月に行ったらしいぞ」

清香がそんなことを言っていたのを思い出した。

「向こうってなんだい、僕はこの世界で父を越えたいのさ！」

「そうかい、まあでも暴れるなら鎮めるさ」

スサノオは飛び、アポロンに斬りかかる。

「フォームチェンジ！アーマーモード！」

クアドリガがバラバラに砕け散ったかと思うとアポロンの体に装着されて行く、その硬い装甲は刀を防いだ。

「なっ……」

「素晴らしいだろう？それにこれは様々な戦闘記録をコピーして再現出来る、例えば……」

アポロンは右腕を高く上げる、その手のひらに槍が形成されていくではないか。

「食らいな、『オーデインのグングニル』」

放たれた槍はいつか見たグングニルそっくりの威力でスサノオに迫る。

「マジかよー！」

あれだけは受けたくない、と密かに思っていた。スサノオは避けようとしますがグングニルはそれに合わせて軌道を変える、神の槍は必

中なのだ。

しかしスサノオは岩陰に身を隠す、槍は岩に突き刺さり動かなくなる。

ふう、と安心していたのもつかの間。

「・・・『スルトのレーヴァテイン』」

上空から紅く燃える剣をアポロンは叩き付ける。スサノオは素早く身を翻し剣を避けるが、剣が地面に叩き付けられたところから炎が広がり、辺りの森を燃やし始める。

「やべえ、やりすぎた」

あちゃーとアポロンは頭を掻く、いやいや力加減してくれ。

「ま、いいか。どんどん行くよ、このクアドリガのテストだ。『灰被娘の全世界』！」

胸のところが開き、時計が現れる、そのとき、アポロン以外全ての時間は止まった。

アポロンはニヤリと笑い

「『金太郎の巨斧』！」

スサノオの前に巨大な斧が現れ。

時計の針が十二時に止まりゴーンゴーンと鐘が鳴る。

「んなっ！」

スサノオは驚く、一瞬にして目の前に巨大な斧があるからだ、斧はスサノオに向かって叩き付けられる、砂煙が上がり、スサノオの姿は見えなくなった。

「ふいー・・・あぶねー」

ギリギリに避けたスサノオは汗を拭う、しかしどうすれば、あの硬い装甲に刀は文字通り刃が立たない。

「騒がしいから来てみれば」

「!?!」

アポロンの背後に見覚えのある男が現れる。

「シヴァー！」

「よう、久しぶりだな」

「シヴァー!? バカな閉じ込められていたはずじゃあ!」

アポロンは腕をシヴァーに向け

「くっ・・・『ミカツチの超電磁』」

「なんだそれ」

シヴァは一際目を大きく見開くと、アポロンの腕の装甲が爆発し、バラバラと碎け散る。

「なに！？何故だ！僕のクアドリガが！？」

「やれやれ、こんなのに苦戦してるのかよ」

フワリとシヴァはスサノオのほうに移動する。

「なにしに来たんだ？」

「いやなに、ユリックがいただろ、そいつの新しい住まいをさ」

「なんだ、優しいなお前」

「なっ！ブラフマーに言われて仕方なく・・・いや！今はコイツをどうにかしないと！」

上空を飛ぶアポロンを睨む

「おのれ・・・！この僕に傷を！」

アポロンは胸を開き、なかから時計が現れる、確かあれが見えたあと、突然斧が現れたのだったな。

「おせえ！」

シヴァはその時計を睨みつける、するとその時計は爆発する。

「な、な！？灰被娘まで！？」

「分かったか？あいつの弱点」

「いや、まったく」

「一度壊されたものは使えない、つまり今の奴は灰被娘と超電磁な
んとかが使えないわけだ」

そこで、とシヴァは続ける

「俺が奴の装甲を目で破壊する、動きを止めてくれ」

スサノオは頷く

「おのれ！ならば『河童の光化学迷彩』！」

スツとアポロンの姿は見えなくなる。

「やれやれ、どこの本に影響されたのやら」

シヴァは近くの川に飛び込む

「早く来い、光化学迷彩とやらものは水に弱いと聞いた」

スサノオは急いで川に入る

「よく知っているな、そんなこと」

「ああ、なんでもブラフマーが聞いたんだと」

「誰に」

「オモイカネだ 来ないな逃げたか？おい、東の」

「・・・え、まさか俺？」

「ああ、お前は東方に住んでるからこれでいいだろ」

「で、なんだよ・・・」

「見てこい」

「は？」

抵抗したがスサノオはシヴァに引っ張り出される。

陸に上がったが気配はなし、本当に逃げた？そう思ったときだ。

「がっ！」

突然首を掴まれる

「ふふ、まさか陸に上がってくるなんてね。甘い」

「甘いのはテメエだ！」

シヴァは川の水をスサノオ目掛けてぶっかけた。

「なに！？」

するとアポロンの姿が現れる、すかさずシヴァはその目でアポロンを見る。

ボンツと爆発音と共にアポロンを守っていた装甲は崩れ落ちる。

「やれ！スサノオ！」

「チツ！僕の傑作が！」

アポロンは手を離すと逃げていく。

「・・・逃がしたか、まあ分悪いことは出来ないな、立てるか？
東の」

とシヴァはスサノオに手を差し伸べる、スサノオはその手を握り、持ち上げた。

「・・・優しいな」

「っ！・・・べ、別に優しくなんか・・・」

「おいおい、いいのか？ユリックを待たせてるんじゃないのか？」

「ああ、そうだったな。じゃあな東の」

「そっぴやどこに住まわせるんだ？」

シヴァはある方向わ指差す

「あっちにある城だ、今は誰もいないからな、ちょうどよかった」

「へえ、よかつたな」

確かあつちのほうにあった城って・・・

スサノオは吸血鬼である彼女が住まえるか不安になった、何せあつちにある城で唯一無人なのは

「いや、それより下ろう」

まだ下流のほうから嫌な空気を感じる、どんよりした禍々しい空気を

『十九章 災いは何度も』

さらに下流へ、ここまで来れば川の流れは緩やかになった。ここで釣りでもしたいが、このどんよりした空気がやる気を削ぐ。

「はあ、でもこのどんよりした空気の原因を調べないとな・・・」

この空気は異常である、妖怪が何千と集まってもここまでは酷くない筈だ。ただ下流、下流へと進むと、人影が見えた。

「っ
「!」

スサノオは身構えた、その人影は己自身の姿をしている。ああ、そうだ。マガツチだ！

マガツチはこちらに気づくとゆっくりと振り返る、足元にはボロボロになった人形がいくつも落ちている。

「よう、お前が原因か」

「久しぶりだなア、見るよこの人形たち」

と足元の人形を一体拾う。

「素晴らしいだろ？人間が流し雛の時に流した雛人形だ」

「なるほど、この川にいい噂がないのはそれか」

「そうか、いい噂はないか。だがな、こいつらが溜め込んだ厄、そ

「これは俺にとって最高の御馳走！」

人形たちから黒い影が浮かび上がり、マガツチのなかへ吸い込まれて行く。

その力は辺りを震わせ、スサノオに冷や汗をかかせた。

「なあマガツチ、お前は何を求めてるんだ」

「さあな、ただ俺はな、人間が嫌いになっただんだ」

「そりゃあ災いは嫌いさ、誰でも」

「フツ、違うね。俺が人間のことを嫌いな理由はな　信仰を忘れてるからだよ」

「信仰、か。仕方がないかもしれないな、人間だってそれぞれの思考を持つ、新しい進化を求める、古いものは忘れられる」

「古いもの？それが気に入くないんだよ！拝むだけ拝み飽きたら捨てられる、それでお前はいいのか？」

「マガツチ・・・悲しいが一度忘れたものはなかなか戻らない」

「忘れたなら思い出させてやるさ！俺の力を魅せてな！」

「それはさせない、力が全てとは限らないからな」

マガツチから黒い影が現れ、スサノオを襲う。スサノオは刀で影を斬り、間合いを詰めていく、マガツチは少し下がると落ちていた人

形が一人でに動きだし、スサノオを襲う。

「つつ！どうやら棄てられた人形たちはお前のことが好きなようだな！」

「そのようだな、いや感激感激」

とマガツチは笑う

「散れ！」

スサノオは刀で人形を斬りつける、なんとということか、二つに分かれることはなく地に落ち、暫く経てばまた動き始める。この間にスサノオはマガツチと距離を詰めた、マガツチはそれでいても笑っており、それがスサノオを苛つかせる。スサノオが刀を振るとマガツチは体を霧散させ、刀を避けた。

「いや似ている、苛立ちの顔。まさにイザナギそのものだ」

イザナギ・・・スサノオは彼を知っている。そしてその名はスサノオをさらに苛立たせた。

「そいつの名を出すなあ！」

僅かに残る塵に向けて刀を振る、が虚しく空を斬るだけである。

「あいつはまだ諦めていない、隙あらば黄泉へと向かおうとする」

「ああ、そうさ。あいつは俺らなんかより自分の妻が好きな薄情者

だよ」

あいつが勝手なことを押し付けたせいで、俺たちがどれだけ苦しみ、悲しんだか。

「いいねえその憎しみ、実に美味い」

その言葉にハッと我に帰る。どういうわけかマガツチは憎しみや悲しみと言った負の感情を欲する、これはやつに力を与えているも同然なのでは？スサノオは気づいた、ならば。

「いや全然悲しくないね！」

「は？」

「いやあお前と戦えて楽しい！」

「た、楽しい!？」

予想通り、マガツチは楽しいという感情に戸惑っている。

「ああ嬉しくもある！今日はいい日だな！」

「や、やめろ！」

マガツチは姿を現すとそくささと逃げていった、あとに残されたスサノオはため息をつき、家へ戻ることにした。

「着いた、ここがお前の住まいだ」

日が照っているなか、一つの城がある。ユリックはその城を見上げ。

「まあ、綺麗な城なこと！」

嫌みそうに言った、確かに外壁は所々崩れ、庭には雑草が生い茂り、門もぐにやりと曲がっている。

「まあ仕方ないさ、何百年も主がない城さ、数名のメイドも渡すからさ」

それでユリックは渋々承諾、先に城へ入る、その背中を見てシヴァは

「すまないな、少しは俺に償わせてくれ」

俺は急ぎすぎた、進化を求めるのに必死になり数多の命を奪った、さらにユリックの記憶さえ。せめてもの償い、これから俺は彼女に償いをしなければならぬ。別にこれはブラフマーやヴィシユヌが言ったことではない。俺自信の意思だ。

さっそく城の修理屋と世話係のメイドを派遣するために一度自分の城に戻るうとしたときだ。

「おや、君は……『私の城』になにかようかね？」

一人の男がいた、その脇には少女、吸血鬼の少女が抱えられている。

そして、シヴァはそれに見覚えがあった、昔、二人の吸血鬼がヴァンパイアハンターに追われていた、俺は気紛れで二人の吸血鬼を助けた、その二人はユリツクとその少女である。いつの間にかいなくなったと思っただが……

「俺の城？この《不夜城》は数百年前に主を失ってそれきりだぞ」

「いや、まあそうかもしれないが、俺が密かに研究所を作っていてね」

「研究所……？その吸血鬼を使ってなにかするつもりか？」

「む、そうだ。というわけだ、通してもらおうよ」

「そういうわけにはいかねえ、悪いがその吸血鬼には見覚えがあるんでね」

「……そうか、なら」

男は吸血鬼を木陰に寝かせるところを向く。

「実力行使と行かせてもらおう！」

『二十章 輝也と救出劇』

あれからスサノオが帰ってきた、そこでふと清香がいないことがつづく。

「あれ、清香は？」

「ああ清香？何でも不夜城のほうに邪気を感じるって言って飛び出したわ」

確かにあの方向に三人ほどの邪気を感じるが。

「はあ、でもなんでまた清香が」

「さあね、お世話になってるからじゃない？あの子意外に優しいから」

「これで怪我でもされたら困るんだがなあ」

「嫌な邪気はこっちな」

清香は森のなかを走っていた、妙に強い邪気が突然現れた、これは早く対処しなければ。そしてスサノオに誉めてもらいたい。

「待て待て待て!!」

その声に立ち止まる、そこには一人の河童がいた。

「何よ、退治希望者？」

「違う!この先は危険さ!でっかい馬が」

清香は御札を河童の口に張り付けると先へ進んだ、なにがでっかい馬か。

暫く進むと突然明るくなった、光のなかに城がある、あれが不夜城か。

「どれ、探検してみましょ」

ふと城壁のほうを見るとその地面だけ、誰かがいたような跡が付いている、そして辺りには血が、まだ新しい。これは何かある、そして城内からは三人分の邪気を感じる、どれも強力だ。

城に入るとかび臭い臭いにムツとした、さて何処から探索するか。地下から二人分の邪気を感じる、数が多い方から退治するか、と清香は地下へ降りる。

「どこだどこだ!」

暗い城内を突き進む、何度か壁に当たるが気にはしない。

「あら、うるさい巫女ね」

そこに一人の少女が現れる

「んー？あなたも探しに来たのかしら？」

何処かで聞いた声、だが何せ暗い、顔を確認出来ない。

「邪魔する気！？私はここの邪気を祓うつもりで来た！」

「あらあら、熱心な巫女だこと。なら少し遊びましょうか？清香」

「え？」

驚いたのも束の間、凄まじい早さで突っ込んで来たのを御札で封じる。

「ちよ、なんであんた私の名前を」

そんな質問は聞かず、次の攻撃を仕掛けてくる、拳は床を砕き、蹴りは壁を砕いた。

「巫女を舐めるなよ！」

「巫女ぺろぺろ」

「キーー！！頭きた！許さない！」

バツと清香は手を挙げる。

「覚悟なさい！洩矢の鉄輪！」

すると手のひらに鉄輪が現れる、その鉄輪を振り上げ、こちらに突っ込む。咲也はそれに真正面から突っ込み、お互いがぶつかりそうになった時だ。

ドンツ、と衝撃が体を走ったかと思うと二人は地面に叩きつけられていた。

「ふむ、巫女と吸血鬼がこんなところで暴れているとはな」

それは誰だか分からない男だった、彼は足で咲也を踏みつけ、清香の首を掴み、持ち上げていた。

「まあいい、来てもらおう、まだいるだろう？君たちの仲間が」

男は二人を引っ張り、さらに奥へと消えていった。

あれからどのくらい経ったのだろう、私は目を開けた、頭が痛む・

「……いつつ……何が……」

目を開けるとそこには懐かしい人が。

「よう、久しぶりだな」

「……輝也！」

しかしこれはどういう状況か、あれは 圭也？しかしなんだこの圭也から感じる邪気、それに輝也からも感じる。

ぼうとする頭でぼんやり輝也を眺めていた。すると輝也が何かあったのかを説明した、どうやら吸血鬼のユナを拐ったシエリダンを追いかけていたらこうなり、どうもユナが暴走しているそうだ。ならば私の御札で動きを止めればいいだけのこと。

ならば早速と御札を取り出した。そのとき

ドオオン！と圭也とユナがこちらに飛んできた。

私はすかさず御札を圭也に貼り付ける。

「こ、これは！」

御札は本来妖怪の動きを止めるもの、神様に使ったって意味はない。

「急いで！神様の力を止めるほどの力はないわ！」

「清香あ！貴様あ！」

それはかつての友人の声であり、最後に聞いた声だった。ドツ、輝也の剣が圭也の胸を貫く。

「……俺は死なない、悪を……滅ぼすまで……は……」

悲しんでる場合じゃない、次はユナだ！私はすかさずユナに御札を貼り付ける。するとどうだろう、輝也はユナを抱き締めたではないか、何をやっているのか。私は呆れたが動きが大人しくなってきた。

「あの状態に陥った吸血鬼を大人しくさせるなんてね……」

咲也は感心している、するとユナは輝也の肩に噛み付いたではないか！マズイ、吸血鬼に噛まれたら

私が対抗しようとしたが咲也がそれを制する、暫くすると二人はドサリと倒れ動かなくなる。

「……やったわね……」

咲也が安堵のため息を吐く。

「で、どうするの、これ」

「私が持って帰るわ、早く帰りたいもの。高天原にいい思い出はないしね」

私はユリックを、咲也は輝也とユナを抱える、どこにそんな力が。

そうだ、圭也は

圭也のほうを見ると既に姿は無かった、一体どこに消えたのか。不気味で嫌な予感がしたが城を出る。

「さて、私は帰る、ユリックも持ち帰ろうかしらね」

「ねえ咲也、あなた吸血鬼なの？」

「ん？ええそうよ」

こんなにも身近にいるとは、吸血鬼が恐ろしい。

「じゃあね咲也、またいつか」

「ええ、また」

三人を背負って咲也は闇に消えていった。しかし懐かしい人たちに会えた、けど別れも　いや、圭也はまだ死んでいない。私はそう思う。

「いいや、今日は帰りましょ」

すっかり辺りは暗くなっている、不夜城の周りは明るいが。

誰もいなくなった不夜城、そこに一人の影が

「何か騒いでたから来てみたけど」

それは城を見上げる。

「いや、懐かしいな。人間に追われてここを逃げ出したけど
まだ来てるのかな、いやもう来てないかな、《覚》は・・・」

とかつての不夜城当主、鶴は寂しそうに呟いた。

『二十卷章 百鬼夜行』

不夜城から帰り、清香は懐かしさを感じていた、あの輝也に出会えた、しかしあの嫌な妖気はなんだったのか。

「清香、無事だったか」

スサノオが心配そうに声をかける、なんやかんやで優しいのだ。

「大丈夫ですよ、それに懐かしい友人にも会いましたし」

「懐かしい友人か・・・」

どこかの山、そこに酒吞童子がいた。目の前には何人もの鬼がいる。

「姉御、ほんまにやるんですか？」

一人の鬼、酒吞童子の側近である茨木童子が言う。

「やるわ、人間どもに鬼の力を知らしめてやるわ」

くい、と酒を呑む

「ですが姉御、最近、山本五郎左衛門が帰ってきたと、あの方の前で大きなことをしたらえらいことになりました」

「茨木、何も心配することはないわ」

「！まさか姉御！」

「ふふ、酒吞四天王の出番よ！」

「おお・・・ついにあいつらを・・・」

「茨木、念のために《牛鬼》の用意もしておけ」

「承知！」

「では行こう！人間どもに鬼の恐怖を教えるため！！
いざ、
《百鬼夜行》！」

ウオオオオオ！！

地が震えるほどの雄叫びを上げる鬼たち、そのなかで酒吞童子は笑

っていた。

翌日、雀の鳴き声が心地よい朝、スサノオは起きると朝食を作っていた。

「今日も平和であることを願う」

神が誰に願うのかわからないが願っておいた。

「スサノオ様！大変です！」

ほら、何か起きた。やれやれと清香の報告を聞く。

「何でも鬼たちが人里を襲ってるみたいです！」

「なんだと!？」

それはいかん、俺はすぐに人里へと向かった。

人里

そこは酷い荒れようだった、家は燃やされ人は鬼によって食い散らかされ、まさに地獄だった。

「酒呑童子いいい！！出てこい！」

そう叫ぶ、すると

「やだね！私に会いたいならまずは酒呑四天王を倒してみな！」

鬼退治は金時に任せたいが・・・仕方ない。

俺が酒呑童子の声がしたほうへ向かおうとしたときだ、前方から四人の人影が見える、それは人ではない。四人の鬼であった。あれが酒呑四天王だろうか？

「よう、お前がスサノオか？話は聞いている。俺は《熊童子》！さあ殺り合おうか！」

やけに血気盛んな鬼だ、熊童子は突然こちらに突っ込むやいなや拳を叩きつける、スサノオはそれを避けるが拳を叩きつけた衝撃に吹き飛ばされる、流石は鬼か、力はスゴい。

だが明らかな隙がある、俺は次に拳を振り上げたときに胴を斬る！

「何故だあー！」

熊童子はその場に倒れる、すると次の鬼が一步出る。

「熊童子は我々のなかで最弱・・・今度はこの僕、《金熊童子》がお相手しますよ」

嫌にこやかな鬼だ。ゆらりと金熊童子は体を揺らすと横から蹴りを入れた、間一髪防いだが危ないところだった。なかなか読めない動きである。蹴りを防ぎ、金熊童子は飛び退いたがそのあともユラユラと揺れている。ふらふらした動きに惑わされてはダメだ。スサノオは金熊に集中する。

スツと僅かに足が動いた。来る！スサノオは刀を構え。

ザンツ！

空を舞う髪、刀は金熊の髪を斬っていた。

「危ない危ない、あと少しで首を持っていかれましたよ」

相変わらずニコニコしている。しかし金熊の攻撃はパターンだ、必ず俺の目の前に現れる、ならば

再び金熊が姿を消す、その時だ。スサノオは蹴りを入れる。

ドッ…

蹴りは金熊の顔にカウンターヒットした。金熊はニヤリと笑うと気を失った。

「あちゃー…金熊もやられたか…」

ポリポリと頭を掻くこの鬼の手足には鉄球が付けられている。

「さ、やるうか。暫くの間稼ぎにもちようどいい。俺は《星熊童子》、今度酒でも呑もうぜっ!」

言い終わると同時に足を蹴り上げ、鉄球をこちらに飛ばしてくる。間一髪避けたがあれをまともに受ければただじゃ済まない、刀で塞ごうとすれば折れるだろう。

ドスン!と鉄球が地面に落ちると次は腕を振り回し、側面から鉄球を飛ばす。

タンッ!

スサノオは跳び跳ね、鉄球を避ける、が。

「掛かったな!」

鉄球は避けたが、鎖がスサノオの足に巻き付き、身動きを取れなくする。

「終わりだ！」

そこに鉄球が飛んでくる。いや待てまだ勝機は

スサノオは一気に星熊へと詰め寄った。

「何!？」

足を振り上げていた星熊は近づいてきたスサノオに対処仕切れない。

「らああ！」

みぞおちに刀の柄を叩き込む。

「ぐっ…」

一歩二歩下がると星熊はそのまま仰向けに倒れた。鎖を外す、さてあとは一人だ。

「強いねー君」

虎柄の服を来た派手な鬼だ。その手には虎のような鋭い爪がある。

「今回は時間稼ぎ、ゆるーく行かせてもらったよ。けどこれも最後だ《虎熊童子》参る」

タッ

キーン！

一瞬だった。一瞬で虎熊はスサノオの懐に入り、その爪を振り下ろした、僅かに防ぐのが遅ければ切り裂かれていただろう。

「へえ…反応出来たか…神様もなかなかやるねえ」

しかし猛虎のごとき剛力に圧される、スサノオは一步下がった。それを見てか虎熊は詰め寄り、突き、突き、突き。スサノオはそれらを弾くが後退せざる負えなかった。

そして背に壁が着くころ、虎熊は勝ち誇った表情で。

「さあ終わりだ、鬼は今日を持って甦る」

鋭い突き！それはスサノオの頭を狙っていた。

スサノオは僅かに頭を動かした。

カッ！

爪は壁に突き刺さる。

「なに！？」

それは刹那、スサノオは身を屈めると虎熊の胸へ峰打ち。

「チッ…勝ったと思っただ…がな……」

虎熊は倒れる、まだ全ては終わっていない、スサノオは酒吞童子のもとへ向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2447u/>

高天原物語

2011年10月28日03時06分発行